

平成23年度 鹿児島大学 FD報告書



鹿児島大学FD委員会
KAGOSHIMA UNIVERSITY Faculty Development

I. 平成23年度FD報告書作成にあたって

- FD委員会委員長(教育担当理事) 2

II. 鹿児島大学のFD活動

第1部 全学的取組み

- 新任教員FD研修会報告 4
- FD・SD合同フォーラム 8
 - 基調講演報告 9
 - パネルディスカッションの概要と総括 11
 - 学生セミナー(学生対象ワークショップ)報告 12
 - 学生セミナー(学生対象ワークショップ)参観レポート 13
- 学生ワークショップ[ピア・サポート第2弾]
「みんなでつくろうピア・サポートの輪」報告 14
- 学生・教職員ワークショップ[ピア・サポート第3弾]
「鹿大らしいピア・サポートを創り出そう」報告 18
- 鹿大版FDガイド第2号・第3号の発行について 19
- 共通教育における学習実態・学習成果に関する調査2010年度報告
及び2011年度調査 20
- 教育・学生支援担当教職員講習会
(新入生オリエンテーション説明者講習会)の報告 28
- 教育センター高等教育研究開発部(共通教育)のFD活動 30

第2部 各学部・研究科のFD活動報告

- 法文学部、人文社会科学研究科
- 教育学部、教育学研究科
- 理学部
- 医学部
- 歯学部
- 工学部
- 農学部、農学研究科
- 水産学部、水産学研究科
- 理工学研究科
- 医歯学総合研究科
- 保健学研究科
- 司法政策研究科
- 臨床心理学研究科
- 連合農学研究科



平成23年度FD報告書作成にあたって

鹿児島大学FD委員会委員長(教育担当理事)

阿部 美紀子

昨年度、教育センター年報から独り立ちして早1年となった。鹿児島大学のFD活動は、各学部・研究科、教育センターの先生方、職員の方々の協力の下、年間に実施する事項なども定着し、それぞれの目的に沿って企画実施されてきた。

鹿児島大学のFD活動のHP (<http://www.kagoshima-u.ac.jp/education/fd.html>)をご参照いただきたい。このページは、22年度に作成、本学独自の活動、他大学との連携活動等の案内、報告等を随時掲載しているが、23年度の活動内容は、質・量共にさらに充実していることがお分かりいただけると思う。これは、FD委員会の中に複数のワーキンググループを設け、全ての委員が必ずどれかに属し、主体的に企画、運営に携わっていただいている賜と思っている。毎年継続的に実施されている各種事業も、実施に当たって少しずつ改善が加えられ、向上している様子が見て取れる。また、23年度に新規に取り組んだ事業としては、鹿大版ピア・サポート体制の整備を最大の課題として取り組んだ。これは、第Ⅱ期中期計画に掲げていたもので、22年度末から教職員+学生、学生のみ、再び教職員+学生によるワークショップを開催、キャンパスライフの中で学生達が必要としている支援は何なのか、職種、職階を越え、また学生も交えた議論の中から、大まかなニーズをつかみ取り、ピア・サポート制度の構築に取り組み、大まかな要項を定めるに至った。ピア・サポーターの具体的な内容、広報等の計画は、企画段階から関わってくれた学生達を中心に働いて、24年度新入生を対象にした鹿大版ピア・サポート(鹿ナビ)を実現させるに至ったのである。
(<http://www.kagoshima-u.ac.jp/education/peer.html>)

FD(ファカルティ・ディベロップメント)は、本学で展開されている教育の質の向上を目指して、改善の道を日々辿っている。FD委員会のミッションにも明記している、「教員・職員そして学生が相互に協働し合ってつくり上げる」ことを念頭に、不断の努力を続けていく所存である。

平成23年度 FD活動一覧

6月	共通教育前期授業公開・授業参観(6/20~7/1)
7月	学生ワークショップ(7/13) 〈ピア・サポート第2弾〉
8月	鹿大版FDガイド 第2号及び専用ファイルの作成
10月	教育センターオープンクラス(10/17~10/22) 新任教員FD研修会(10/25・10/27) 共通教育後期授業公開・授業参観(10/31~11/30)
11月	FD・SD合同フォーラム(大学地域コンソーシアム鹿児島FD・SD活動事業部会と共催)(11/26)
12月	学生・教職員ワークショップ(12/22) 〈ピア・サポート第3弾〉
1月	共通教育における学習実態・学習成果に関する調査2011
3月	教育・学生支援担当教職員講習会(新入生オリエンテーション説明者講習会)(3/27) 鹿大版FDガイド 第3号の作成 平成22年度FD報告書の作成

II
鹿児島大学
の
FD活動

第1部
全学的取組み

新任教員FD研修会報告

鹿児島大学FD委員会では、平成22年7月2日～平成23年7月1日までに本学に採用された新任教員を対象に、2回にわたるワークショップ形式の研修会を開催した。本報告では、その概要および事後アンケートの結果について記載する。

1. ワークショップ1

日時▶ 平成23年10月25日(火) 15:00～17:15

場所▶ 稲盛アカデミー棟1階 A11教室

目標▶ 参加者は、終了時に、教育に対する関心を高め、望ましい学生の学習について理解することができる。

- 本学の学生及び全国の大学生の学習活動、態度の動向を理解し、本学の学生指導で予想される問題点を指摘することができる。
- 望ましい学生の学び方について議論できる。

プログラム：(進行：田口則宏FD委員)

15:00	開会挨拶(阿部美紀子 FD委員会委員長(教育担当理事))
15:05	講演「学生の実態を知る」(伊藤奈賀子FD委員)
15:25	グループ討議の説明
15:30	グループ討議
16:45	グループの発表・討議
17:05	まとめ
17:15	アンケート記載、解散

参加者の属性を図1～3に示す。全参加者数は25名で、ほぼすべての部局から万遍なく参加されていた。職位では、准教授および助教が同数を占めており、両者で全体の8割であった。教育経験は、経験のない方から10年以上のキャリアをお持ちの方まで多様であった。

図1：参加者の所属

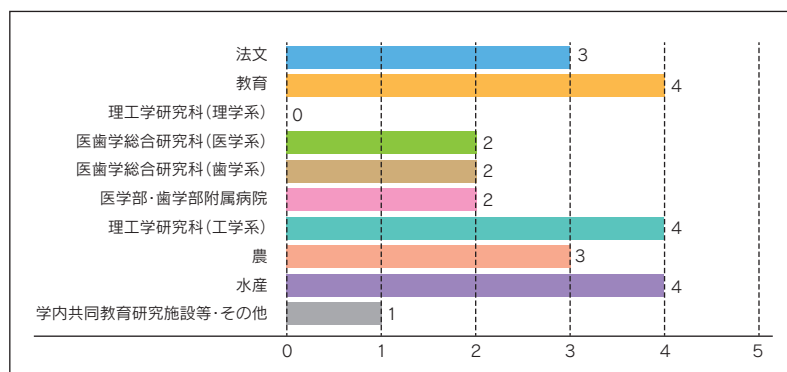


図2：参加者の職位

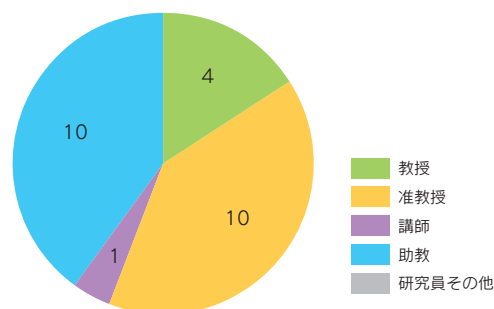
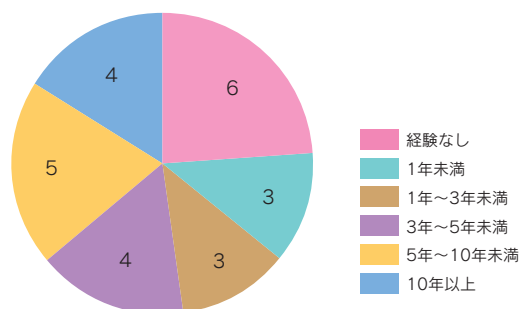


図3：参加者の教育経験



本ワークショップでは、鹿児島大学において教育活動に携わるために、まず対象となる学生の学び方の実態について知ってもらうために、2010年度に本学2年生1544名に対して実施した共通教育における学習実態・学習成果に関する調査結果に基づく講演(伊藤奈賀子FD委員)により開始された。その後、課題1「各教員が経験した学生の学習上の問題」、課題2「学生の望ましい学習態度、習慣とは」の2つの課題について、全体を4つに分けたグループ内で討論をしていただいた。その後、全体討論として、グループ内での討議内容を参加者全員に対して発表していただくとともに、グループ間での討論を行っていただいた。

その結果、課題1については、主に以下の様な問題点が抽出された。

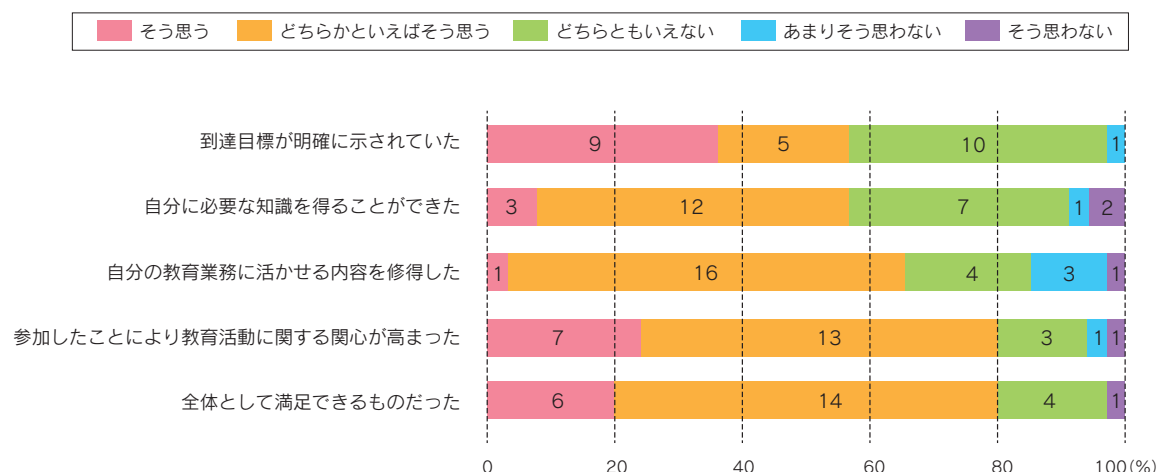
- ハングリー精神の欠如
- 原理原則を学ぼうとせず、結論や結果をすぐに求めたがる
- コミュニケーション能力の不足(文章や日本語が書けない、討論ができない、など)
- 社会やニーズに関心がない
- 基礎的知識がない

課題2については、主に以下の様な項目が抽出された。

- 興味を持って能動的に授業に参加する
- 予習をする
- 意見を言う
- 内向きさを解消する
- 大学が求める学生像を明確にする必要がある

ワークショップ終了時に無記名で記載を依頼したアンケート結果について図4に示す。今回のワークショップでは、レクチャーなどによる知識の伝達は最低限とし、参加者全員が具体的なテーマに対して討論に参加していただくことにより、参加者間の学生教育に対する問題点や認識の共有を図ることを主目的とした。その結果、いずれの質問項目についても比較的肯定的な見解が示されており、「参加したことにより教育活動に関する関心が高まった」の項目では80%の参加者が肯定していた。

図4: アンケート結果



2. ワークショップ2

日時 平成23年10月27日(木) 15:00~17:15

場所 稲盛アカデミー棟1階 A11教室

目標 参加者は、終了時に、教育に対する関心を高め、望ましい学習指導を計画することができる。

- 効果的な学習を促し、主体的に学習する学生を育てる教育方法を議論できる。
- 自らの教育場面で学生がより主体的に学習するための改善方法を提案することができる。

プログラム: (進行:田口則宏FD委員)

15:00	開会挨拶(阿部美紀子 FD委員会委員長(教育担当理事))
15:05	講演「成人の学び(成人教育学)」(田川まさみFD委員)
15:25	グループ討議の説明
15:30	グループ討議
16:45	グループの発表・討議
17:05	まとめ
17:15	アンケート記載、解散

参加者の属性を図5～7に示す。全参加者数は21名で、部局によって参加者のばらつきが認められた。職位では、半数以上が准教授であった。教育経験は、経験のない方から10年以上のキャリアをお持ちの方まで多様であった。特に5年以上のキャリアを有する方が半数以上を占めていた。

図5:参加者の所属

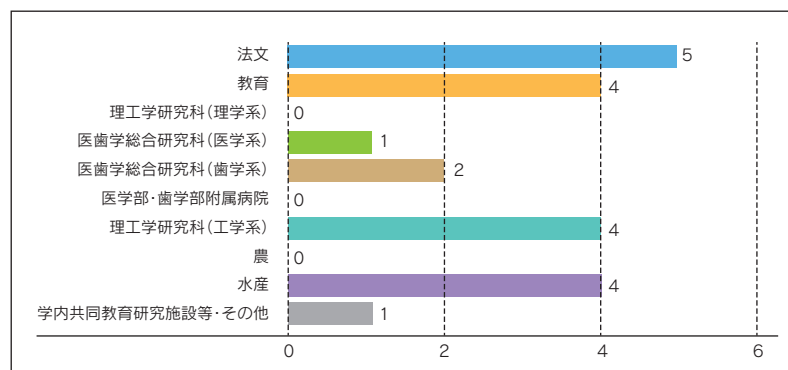


図6:参加者の職位

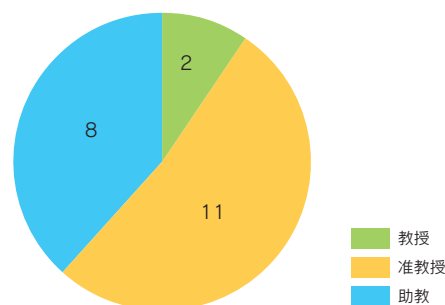
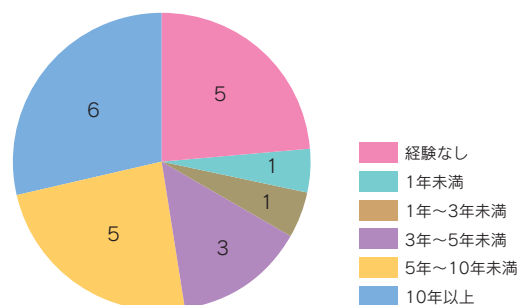


図7:参加者の教育経験



本ワークショップでは、ワークショップ1の内容の続編として、今後鹿児島大学において教育活動に携わるために、どのような理念で教育を行っていくべきか、について考えてもらうために、その基盤となる「成人の学び方(成人教育学)」に関する講演(田川まさみFD委員)により開始された。その後、課題1「各教員が経験した指導方法による学生の学びの変化」、課題2「望ましい教員の態度、教育方法とは」の2つの課題について、全体を4つに分けたグループ内で討論をしていただき、グループ内での討議内容を参加者全員に対して発表していただくとともに、グループ間での討論を行っていただいた。

その結果、課題1については、主に以下の様な項目が抽出された。

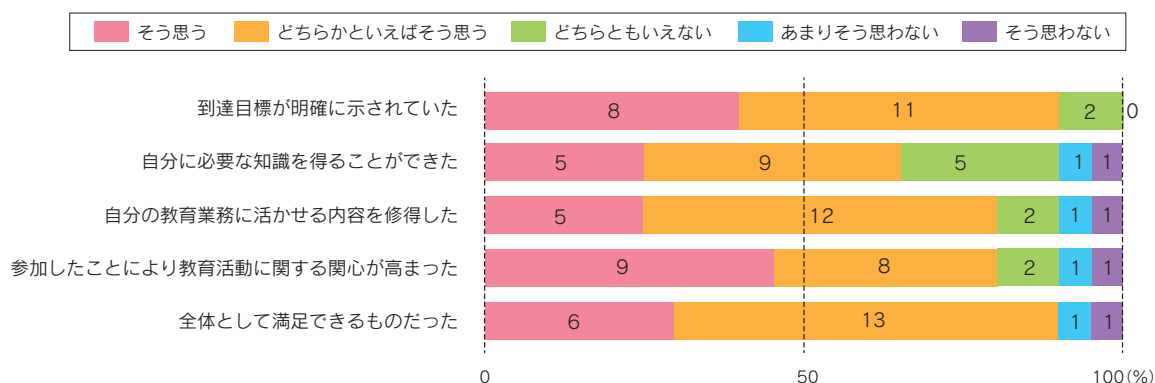
- 最初に考えさせ、その後情報を与えると、達成感を与えやすい
- 実習、実験等で「体験」させることで実社会での応用などのイメージがわく
- 興味を持たせるようにする
- 目に見える形でのゴールや見通しを持たせると態度が変わる
- キャリア意識を持たせると意識が高まる
- 教え方にもアクセントが必要
- 大人数の授業でもコメントシートに丁寧に回答すると、学生自身との距離が縮まる
- 不真面目な学生に対して厳しく指導すると効果的
- 教育学部では「教育実習」の前後で大きく変わる

課題2については、主に以下の様な項目が抽出された。

- 学生に考えさせ、それを導く教師
- 自力で問題を解決に導くような教員が理想
- 教員が教育・指導に対する明確なビジョンを持つことが重要
- (学生との間に)一定の距離感を保って親身に接する
- 答えが無い課題を考えさせる
- 共に歩む
- 将来の働く場、危機意識を見せる

アンケート結果について図8に示す。いずれの質問項目についても比較的肯定的な見解が示されており、「そう思う」と回答した割合はワークショップ1の結果に比較して増加している傾向であった。一方、2回のワークショップを通じて、いずれの項目についても否定的な見解を持っている参加者がいるということも認識しておく必要があると考えられる。

図8: アンケート結果



3. まとめ

以上、2回にわたる研修会を開催した結果、今後の課題として以下の2点が挙げられた。

- ①ワークショップを2回行うのであれば、次のように内容を異なるものにしてはどうか。
 - 異なる専門領域の教員との交流(意見交換することを目的とし、気づき、刺激を受けあう)
 - 研修内容のテーマ別とする。(「授業のスキルアップ」、「専門職育成」など)
- ②いかに参加者を増やすか、参加を促す工夫をFD委員会で議論する。

FD・SD合同フォーラム

1. はじめに

平成23年度のFD・SD合同フォーラムは、本学FD委員会と大学地域コンソーシアム鹿児島FD・SD活動事業部会との共催で開催された。メインテーマは「学生の学び合いを通じた活力ある大学づくりを目指して」とし、前半は秦敬治愛媛大学教授による基調講演があり、後半は教職員対象のパネルディスカッションと、学生対象の学生セミナーに分かれて行われた。

鹿児島県内外の大学・短大・高専及び本学の教職員等111名に加え、愛媛大学の学生4名や県内の大学及び本学の学生32名が参加して、盛会に本フォーラムを終えることができた。

2. 次第

日時▶平成23年11月26日(土) 13:00～16:30

場所▶共通教育棟3号館2階 321号教室

3. プログラム

時間	内容
13:00～13:20	開会、趣旨説明
13:20～14:20	基調講演 「愛媛大学の学生支援とリーダーズスクールの事例～学生と教職員が本気で向き合うとは～」 秦 敬治(愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室 教授)
14:20～14:30	休憩
14:30～16:00	A:パネルディスカッション(教職員対象) 事例報告1: 『自分の言葉で表現できる』学生の育成 大久保 幸夫(鹿児島国際大学経済学部長・就業力育成プロジェクト室長) 事例報告2: 「取材学習を取り入れた循環型初年次教育」 竹内 勝徳(鹿児島大学法文学部教授) コメンテーター:秦 敬治(愛媛大学教授) 司会:西 隆一郎(鹿児島大学水産学部教授)
	B:学生セミナー(学生対象) 「自分を見つめ、組織を見つめる」 参加者:鹿児島大学学生・県内他大学学生 ファシリテーター:愛媛大学ELS学生
16:00～16:30	振り返り
16:30	閉会

FD・SD合同フォーラム

基調講演報告

1. はじめに

平成23年11月26日(土)に開催されたFD・SD合同フォーラムには、愛媛大学から秦敬治教授とリーダーズスクール(ELS)の学生4名を招き、「学生の学び合いを通じた活力ある大学づくりを目指して」というテーマで行われた。

鹿児島大学の教職員79名、学生32名、県内の大学等からは教職員26名、学生17名、県外の大学教職員4名、一般2名、合計教職員等111名、学生49名の参加があった。ここでは秦教授による基調講演について、概要を報告する。

2. 基調講演

愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室の秦教授を講師として、13時20分から1時間にわたり、「愛媛大学の学生支援とリーダーズスクールの事例～学生と教職員が本気で向き合うとは～」という題目で行われた。

愛媛大学における学生リーダーシップ養成とは、「社会や家庭でリーダーシップを取れる人を育てる」ことを目指している。従来の学生支援では、困っている学生を中心に行われてきたが、ソーシャル・スキルとスタディ・スキルの観点から、両方のスキルを高めることを目指し、両方のスキルを高めた学生を第1層(学生リーダー)、どちらかのスキルのみが高い学生を第2層、どちらも低い学生を第3層と位置付けている。

ELSの目的

ELSの目的は、次のようになっている。

1. リーダーならびに将来リーダーになり得る学生が、在学中(授業やゼミ、サークル活動、ボランティア活動、大学行事など)の様々な問題を解決できるようになり、その経験を通して人間的に成長すること。
2. 成果として、修了生が卒業後の市民社会や職場においてリーダーシップを発揮することで社会に貢献すること。
3. 第1層の学生が一般学生(第2・3層)を支援することによって、大学の諸活動を活性化させること。



**第1層の学生を支援する新たな学生支援
これによって他の学生への波及効果を期待**

ELSプログラム

(1)リーダーシップ関連授業

1、2年生を主対象とする共通教育科目で、2009年度6科目開設された。ELSの導入的位置付けで、初級レベルである。科目名は、「ライフマネジメントとセルフリーダーシップ」、「リーダーシップとビジネススキル」、「伊予の伝承文化を学び伝えるリーダー村」、「ライフストーリー・インタビュー」、「ボランティア活動」、「自分と仕事」である。

(2)サークル・リーダー研修会

サークルの現代表と次期代表を主な対象とし、1971年から継続して実施している2泊3日の合宿研修である。担当は機構の教員で、非単位認定プログラムである。愛媛大学の実態に合わせたオリジナルテキストを使用し、中級レベルの集約的研修である。主な学習テーマは、「リーダーシップ論」、「効果的な新人確保法」、「会議の進め方」、「アルコール、セクシャルハラスメント防止」、「人間関係調整法」である。

(3)ELSプロジェクト

大学企画プロジェクトと学生企画プロジェクトがあり、この認定は教育・学生支援機構の議に基づき、必ずELSスタッフが配置される非単位認定プログラムである。これまでに実施されたものは、「学生による24時間テレビの企画・運営」、「松山のリーダー松山市長との座談会」、「章光堂プロジェクト」、「A-NATIONプロジェクト」、「日本・韓国リーダー交流会」、「愛媛FC応援プロジェクト」などがある。

(4)ELSゼミナール

毎学期、夜間クラス(150分×12回)として開講される単位認定プログラムである。人数限定(30名)で公募され、定員を越える場合は作文・面接で選抜される上級レベルのプログラムである。リーダーシップスタイルの理解と自己分析・他者分析、リーダーシップに必要なリテラシーの習得、受講学生を講師とした40分間セミナー方式などが行われる。特にスタッフによる観察・助言などでは、9人のスタッフにより授業中の観察、授業の始めと終了後の面談、ランチ・授業外の時間を使った観察、スタッフミーティングによる共有の徹底など、十分なフォローが行われている。

(5)ELS合宿研修

毎学期1泊2日でゼミナールの学習成果を発表する場として開催され、企画、実施、評価を学生が行っている。

3. おわりに

愛媛大学リーダーズスクール(ELS)は、優れたリーダーを育てるという、全国の大学でも今まで行われていない取り組みであり、その結果としてピアサポート体制を創出するという試みである。その養成プログラムとしては、単位認定プログラムだけではなく、非単位認定のものも準備され、9人というスタッフがかかわっている。このような試みは、本学では容易に導入することはできないと思われるが、ピアサポート制度を取り入れるためには、何らかの形でリーダー養成のプログラムを取り入れなければならない。そのためにも、大変参考となる講演であった。

FD・SD合同フォーラム

パネルディスカッションの概要と総括

今回のパネルディスカッションは2件の事例報告の後、コメンテーターから事例報告に関するコメントがあり、その後フロアとの質疑応答が行われた。

まず1件目の事例報告は鹿児島国際大学の久保幸夫先生から『自分の言葉で表現できる』学生の育成」と題する文部科学省の「大学生の就業力育成支援事業採択」プロジェクトに関するものであった。

本プロジェクトは、就職面接などで自己の主体的な意見構築ができない最近の学生の一般的傾向という現状を全体的な背景として踏まえている。そしてその上で企業や地域でのフィールドワーク、国内外でのインターンシップ等での学生の主体的で積極的な経験を通じて、「聴く力」、「話す力」、「考える力」などの就業力を育成するということが眼目とされている。さらに、Webキャリア・ポートフォリオ(WCP)の活用によって学生がPDCAサイクルを実践できる仕組みも構築されているのが本プロジェクトの特徴である。このWCPの記録を教職員が共有することで学生に対する有効なサポートを提供し、学生の気づきを促すことで、学生の自己実現型のキャリア形成を目指すというものである。

2件目は、本学法文学部の竹内勝徳先生から、同学部人文学科の実践例として「取材学習を取り入れた循環型初年次教育」と題する事例報告がなされた。これは文部科学省大学教育推進プログラム採択事業となっているものである。

本プロジェクトは、従来型の座学中心の文系教育に新機軸を打ち出すべく、現代社会が要求する実践力と問題解決能力の育成を目指して実施しているものである。本プロジェクトでは、人との交わりのなかで、「見る、聞く、読むなどの感じる力」、「調べ、考える力」、「書き示す力」を初年次学生が習得すべき力としてとらえ、企業との連携等を通じて多メディアを駆使した現場実習の取材学習を導入している点が特色となっている。また、いわゆる先輩、後輩という伝統的なつながりのなかで、授業には先輩をStudent Assistant(SA)として起用するが、その授業を受けた学生を1～2年の講習の後SAとして再び初年次教育に参加させるという循環型の人材育成を実施することで、初学年から高学年までの教育の連携性・系統性を実現しようとしている点も本プロジェクトの特徴として挙げることができる。

上記2件の事例報告の後、コメンテーターの愛媛大学の秦敬治先生からのコメントがあり、本日の基調講演、事例報告に共通する要素としては、現代社会のニーズに応えるべく、いずれも学生が能動的に自己表現する力の育成に重点が置かれていることが挙げられる、というご指摘があった。またフロアからの質疑の中で、今回紹介された事例の、学生と教職員の密度の高いかかわりあいを実践する教育体制の中で、やはり、学生の状況を教職員がどの程度しっかり把握して有効適切なフィードバックにつなげていくかが、このようなプロジェクトを成功させる上で重要なポイントであろうという意見が出された。

総体的に、今回のパネルディスカッションは教育の現場を学内に限らず広く実社会との接点形成を積極的に構築することで、より活性化された学生と教職員の新たな連携を生み、それが結果として学生の豊かな自己発信能力の形成につながるという、新たな実践型教育の方向性が説得力を持って示されたところに大きな意義があったように思われる。

(文責 教育センター 富岡龍明)

FD・SD合同フォーラム

学生セミナー(学生対象ワークショップ)報告

参加学生 5人/G×10G ⇒約50人

テーマ「リーダーシップの必要性とスタイル」

参加学生は、ワークをとおした学生相互のコミュニケーションの中で、統率力や指導力、人間関係力を養っていく。最終的に、リーダー的役割を担える学生を育成・支援することが目的であるが、リーダーシップはリーダーだけが持つものではなく、組織の中にいるメンバー全員が発揮していることも認識してもらおう。例えば、他のメンバーを励まし、組織を導くこともリーダーシップの一形態である。実際のワークショップの流れとしては、参加学生に対してリーダーシップとリーダーについて考えるために、以下の3段階のワークが行われた。

I. 自分と出会う(アイスブレイク)

緊張をとき、今までの自分(参加学生)を振り返るために、所属団体に心に残ったエピソードを入れてグループ内で自己紹介した。

II. リーダーシップと自分

提示された事例を読んで、自分だったらどうするかについて、解決するための具体的な行動とその理由を各グループ内で発表した。発表後に誰かの意見について、賛成/反対の意見交換を行った。

次に、各自が6つのリーダーシップスタイルのどれに当てはまるかの簡単な自己診断を行った。ここで認識したリーダーシップの特性とこれまでの自身の行動を照らし合わせ、長所と短所を自覚した上で、もう一度、同じ事例について再考察・討議した。

このワークでは、組織で起こりがちな課題を解決するために、問題解決技法を使って考え、解決策をグループで共有するというワークであった。この過程をとおして、自分を見つめ直し、自身のリーダーシップの型を知った上で、場合により6つのリーダーシップスタイルを使い分けて、組織の課題に対応することの重要性を学んでいた。

III. 組織と自分

今、どのような課題があるかを具体的に考え、その中から最も解決したい課題をひとつ挙げた。それについて討議し、組織をもっとよくするために自分が今日から取り組むことを考え、皆の前で宣言し、ワークは終了した。

(文責 医学部 緒方重光)

FD・SD合同フォーラム

学生セミナー(学生対象ワークショップ) 参観レポート

まず自身のリーダーシップの特性を把握し、それを伸ばして自分の所属する集団に貢献する際に役立てようという実践的なワークショップであった。導入のice breakからよく練られた構成であった。ワークショップは配付された資料の課題をまず個人で考え、その後でチーム内で意見交換するという流れで進行した。初対面の学生が5人で1チームとなったが、参加学生は直ぐに打ち解けて和気あいあいとワークショップを行っていた。

愛媛大学の学生4名がリーダーとなりワークショップを進行させたが、非常にスムーズに進行させていた。交代で進行役を務めるだけでなく、全員で各チームを見て回り適宜助言を行っていた。

愛媛大学のリーダー学生の自信に満ちた態度が印象的であった。4名のうち、4年生が2名、2年生と1年生がそれぞれ1名であったが、そのいずれもが非常に場馴れしており、院生も含まれる参加学生に対して憶する様子は全く見られなかった。個人的な所感であるが、この学生ワークショップは本学の学生間のピア・サポートの手本にはならないであろう。愛媛大学のリーダー学生達は非常に良く訓練されたTAと見なすべきであって、一般学生間のピア・サポートと見るべきではない。教員による教育の補完として学生間のピア・サポートを考えるならば、このようなレベルのTAを育成する労力は全くペイしないであろう。事実、秦先生も述べられていたように、愛媛大学では学生の育成に時間と労力を十二分にかけている。以上。

(文責 理工学研究科(工学系) 内山 博之)



学生ワークショップ〔ピア・サポート第2段〕

「みんなでつくろう ピア・サポートの輪」報告

1. はじめに

日時 平成23年7月13日(水) 13:30~16:40

対象 2年生以上の学部学生・大学院生(各学部等推薦2名以上)
ボランティアサークル所属学生, ボランティア支援センター登録学生

参加者数 27名

場所 郡元キャンパス 共通教育棟2号館1階 213講義室

目的 本学においてピア・サポート制度を設けるに当たり、当事者である学生自身が現状認識を共有し、状況やニーズに合った制度のイメージ構築を図る。また、個人としての主体的な貢献の仕方について考える機会とする。「個人ワーク→グループディスカッション→全体共有」の流れに基づき、多様な学生の存在を意識したうえで、本学に相応しいピア・サポート制度の構築への一助とする。

2. ワークショップの概要

到達目標

- 鹿兒島大学に相応しいピア・サポート制度のイメージを他者に説明できる。
- ピア・サポート制度に対する自らの貢献の仕方について他者に説明できる。
- ピア・サポート制度の構築に当たり、大学(教職員)への要望を示すことができる。

進行: 伊藤奈賀子(教育センター准教授)

時間	内容
13:30~13:35 (5分)	開会挨拶(阿部美紀子 FD委員会委員長(教育担当理事))
13:35~13:40 (5分)	今日の説明
13:40~13:50(10分)	他大学のピア・サポート事例(教務課 濱崎章子)
13:50~14:05(15分)	グループ分け・自己紹介
14:05~14:15(10分)	休憩
14:15~14:30(15分)	アイスブレイク
14:30~15:05(35分)	ダイアログ1, 2
15:05~15:15(10分)	休憩
15:15~16:10(55分)	ダイアログ3, 4
16:10~16:25(15分)	各グループの発表
16:25~16:35(10分)	まとめ
16:35~16:40 (5分)	閉会挨拶(中島あや子FD委員)

はじめに、阿部FD委員会委員長による開会挨拶の後、教務課職員濱崎さんから他大学でのピア・サポート取り組み事例紹介がなされた。

その後、学生同士5~6人ひと組のグループに分かれ、ダイアログ(対話)という手法を用いて、「鹿大のピア・サポートについてあなたが思い浮かべるのはどんなことですか?」、「鹿大のピア・サポートとしてどんなものがあると良いと思いますか?」、「鹿大のピア・サポートにどうかかわりたいと思っていますか?」などのテーマについて積極的に話し合われた。

最後は、まとめとして、各グループオリジナルのピア・サポートアイデアを模造紙に書き出し、それぞれ他のグループのアイデアと見比べながら意見交換をし、中島FD委員会委員の挨拶でワークショップを締めくくった。

3. 各ダイアログに対してのグループでの話し合い内容

〈ダイアログ1〉

「鹿大のピア・サポートについてあなたが思い浮かべるのはどんなことですか？その理由は何ですか？」

▶ 新入生に対して

- 学生委員会の新入生向けイベント…部屋選び・紹介(生協)や履修登録
- 医学科の新歓キャンプ
- 新入生オリエンテーション…看護学科は学生主催
- 学生委員会のAO・推薦合格者集まれの会
- 新入生の時間割決め…サークルの勧誘で教えている

▶ 学生生活に対して

- ボランティア支援センター…ボランティアをしたい学生に対して、その人に適したボランティアを紹介している
- 留学生チューター
- 部活動や研究室などの身近なところで相談

▶ 学習支援に対して

- コース分けの際、先輩たちの話を聞ける(法文学部)
- 実験をTAの人たちが手伝ってくれる(工学部・水産学部)
- 図書館の使い方

▶ 就職活動に対して

- 就職活動のインターンシップについて相談

〈ダイアログ2〉

「鹿大のピア・サポートに期待する役割はどんなものですか？その理由は何ですか？」

▶ 新入生に対して

- 新入生オリエンテーション…新入生に大学生活の流れをつかんでもらう

▶ 学生生活・学習支援に対して

- 学生間での見回り・声かけ…不審者対策
- 他学部との交流…他分野との横断的な情報交換。今は、他学部の人と会う機会がほとんどない
- 縦のつながり…毎年、同じ学科の他学年と顔合わせの時期をつくる。そこから交流が広がっていくのでは
- 留学生をグループで世話する
- 過ごしやすい環境づくり…学びにいい環境づくりへ

▶ 就職活動に対して

- 4年生・卒業生の声を聞きたい…就活へつながるため

▶ ピア・サポート全体に対して

- 身近であること、幅広い相談に対応していること

〈ダイアログ3〉

「鹿大のピア・サポートとしてどんなものがあると良いと思いますか？その理由は何ですか？」

▶ 特定の場所に集まって行うピア・サポート

- サポート室みたいところに、相談員(仲介役)がいてマッチングする(「この問題はこの人に相談すればいいよ」と紹介)。相談員は話しやすい人で、お茶やスイーツなどがあればもっといい
- 学部に「悩み相談室」を設置する: ランチタイム等の活用…食事をする場所を学科で決めて、そこに来れば他学年とも話せるようにする。
- カフェのような空間を利用して、学部・学科に関わらずに気軽に立ち寄れる空間があればいい(研究室カフェ)

▶ 情報交換としてのピア・サポート

- 学生掲示板
- インターネットを利用した情報提供サイト…卒業生も利用できて、仕事について質問出来たり、仕事の内容を知ることが出来たりするのは、就活生にとっても大いに参考になる
- 同窓会…卒業生も在生もみんな集まる

▶ 制度的なピア・サポート

- 研究室やサークル選び、他のもの全てインターンシップ的な制度があればいい…必修講義としてつくって色々なものを体験できると面白い
- 学習サポート

〈ダイアログ4〉

「鹿大のピア・サポートにどうかかわりたいと思っていますか？その理由は何ですか？」

- 最初の枠組みづくり
- 今4年生なので、紹介する立場(例えば、研究室を紹介したり、フィールドに連れて行ったり)
- フィールドに後輩を連れて行って、「ほら、今みんなが勉強している内容はこんな風に役立つんだよ！」と教える
- 4年生なのでサポーターとしてこの先ピア・サポートの中心となる後輩のサポート
- 他学部の人を気軽に紹介してあげられる人
- 情報発信
- 自分に無理なく関わっていくことが大切だと思う。仕事としての感覚ではなく、生活の一部として多くの人が少しずつ関わっていくことで広く浸透していくと思う
- 卒業してからも、社会人として関われる機会を見つけてサポートしていく

4. 参加者の感想

参加者の感想の主なものを以下に紹介する。

▶ ピア・サポートの理解に関するもの

- ピア・サポートは「支援」というより「協力」なのだと自分なりに思ったところです。
- 現時点でも、思った以上にピア・サポートがあると知った。しかし、それぞれにはやはり短所もあるので、もっと「身近」、「行きたくなる、そんなコミュニティがあれば良いと思った。
- はじめはピア・サポートのイメージすら持っていなかったが、話し合いの中で、考えていく中でその事と向き合うことができた。自分達は作り上げていこうという意識が足りていないが、今後もこのような活動を続けていけば鹿大はもっと良くなると感じた。

▶ 意見交換の場に参加した感想

- 学部・学年の枠を越えて意見交換できてよかったです。
- 十人十色。様々な意見があって良かった。
- 自主参加ではなかったけど、色々な方と意見交換をしたり、一つのテーマについて考えることができ、とても有意義で楽しい時間を過ごすことができたように思います。人と意見を交換し自分の意見だけを通そうとするのではなく、様々な人の意見を聞いて、意見が共有できるところを考えるのが重要なのだと思いました。その他、少数ではあるが、施設・設備に関する要望もあった。

5. おわりに

今回の学生ワークショップでは、鹿大のピア・サポートに学生自身がどう関わるかについて意見交換を行った。意見交換の中心となる4つのダイアログは、参加者を無理なく到達目標へと導くよう「個人ワーク→グループディスカッション→全体共有」の流れに基づきプログラムされていた。その結果、前出の3.各ダイアログに対してのグループでの話し合い内容や4.参加者の感想にも見られるように、ピア・サポート制度の当事者である学生自身が現状認識を共有し、状況やニーズに合った制度のイメージ構築を図ることについては一定の成果を得ることができた。また、個人としての主体的な貢献の仕方について考える機会を提供することもできたので、このワークショップの当初の目的はほぼ達成されたと思われる。しかしながら、未だ具体的な制度の構築には至っていないので、今後は、これまで開催したワークショップの成果をより具体的な制度設計に向けた取り組みとして発展させていくことが期待される。

学生・教職員ワークショップ〔ピア・サポート第3段〕 「鹿大らしいピア・サポートを創り出そう」報告

1. はじめに

日時▶ 2011年12月22日(木)16:10~18:45

参加者数▶ 学生29名、教員16名、職員14名(全59名)

場所▶ 稲盛アカデミー棟1階

目的▶ 過去2回のワークショップでのピア・サポートの共通理解の獲得、ピア・サポートに関する提案等についての意見交換を踏まえ、具体的な体制づくりを目指す。

目標▶ 学生…当事者として関わることのできる制度案を他の参加者と協力してつくる
教職員…制度の意義を理解、支援できるような制度案を他の参加者と協力してつくる

2. ワークショップの概要

プログラム:(進行:田口則宏FD委員)

16:10~16:35	【導入等】	グラウンドルールの確認 グループ分け 自己紹介
16:35~17:30	【ディスカッション】	テーマ選択:新入生支援、学習支援、学生生活の支援、就職活動支援 具体的な支援内容、方法、時期、場所などの検討
17:35~18:45	【グループ発表・質疑応答】	

グラウンドルールは円滑なディスカッションを行うための基本的な規則である。特に本ワークショップでは立場も年齢も異なる多様な参加者であることから、どの参加者も対等な発言権を持つ、他者の話をさえぎらない、場を独占しないことなどが強調された。

ディスカッションに際しては、7~8人からなる学生・教員・職員混合グループが結成された。各グループには話し合いのメモとプレゼンテーション資料の提示の役割を兼ねてホワイトボードが与えられた。

3. おわりに

今回のワークショップを受け、具体的な制度の設計が求められる。今回、各グループから様々なピア・サポート制度の提案が行われた。しかし、中には既に一部学生によって、あるいは学部学科単位で部分的に行われている取り組みも存在する。そうした既存の取り組みとの役割分担を考える必要がある。大学として支援すべき全学的ピア・サポート制度とはどのようなものであるかについて、実現に向けて具体的な検討を行うことが喫緊の課題である。

なお、ピア・サポートについては、その意義や効果についてまだ疑問の声も少なくない。また、認識が不十分な学生が支援を行うことによる弊害を懸念する声もある。大学として制度設計を行う場合には、支援側に立つ学生に対する事前研修が不可欠である。その上で、支援する学生も支援を受ける学生もそれぞれがともに成長できるような内容や方法の検討が必要である。

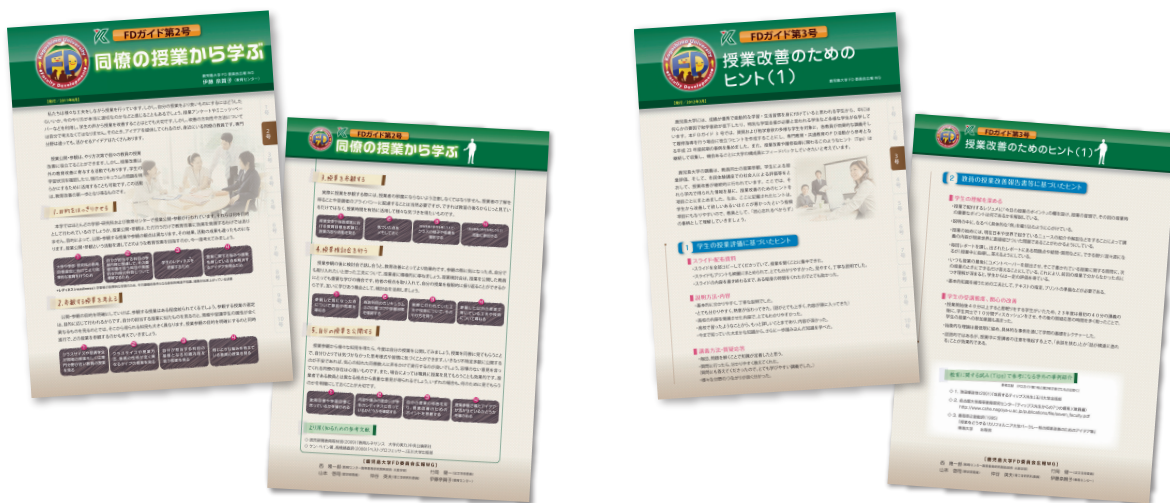
(文責 教育センター 伊藤奈賀子)

鹿大版FDガイド第2号・第3号の発行について

平成22年度より発行が開始された「鹿大版FDガイド」は、平成23年度には、第2号、第3号、および特別号が発行された。このうち、特別号に関する説明は別な項目に譲り、ここでは、他の2つの号について簡単に説明する。

さて、振り返ってみると、昨年度刊行された「鹿大版FDガイド」の第1号のテーマは「授業にピア活動を取り入れる」であり、学生同士の議論や協同作業といったものを授業に取り入れる方法について、様々なヒントが提供された。第1号でこのテーマが選ばれた背景には、近年、大学生活の様々な場面で、学生同士が支援をし合う「ピア・サポート」の重要性が増しており、鹿児島大学でも、その実施へ向けてワークショップが開催されたという事情があった。しかし、考えてみれば、この「ピア（同僚・仲間）」によるサポートは、むしろ学生同士だけでなく、教員同士にも該当する。例えば、鹿児島大学のすべての部局で長年に亘って実施されている「授業公開・授業参観」も、教員同士が互いの授業を通して学び合い、授業改善をサポートし合う取り組みである。そこで、第2号では、テーマを「同僚の授業から学ぶ」として、すでに教員の間で定着した授業の公開・参観をより効果的なものとするためのヒントを提供した。具体的には、授業公開と授業参観の意義、参観する授業の絞り込み方、参観の仕方、検討会の活用方法などである。そして、この第2号を受けた第3号でも、やはり授業改善が取り上げられたが、ここでは、テーマを「授業改善のためのヒント(1)」とし、平成23年度の専門教育・共通教育のFD活動の中で得られたヒントを提供した。具体的には、学生の授業評価に基づいたヒントと、教員の授業改善報告書等にもとづいたヒントである。FD委員会としては、授業改善や履修指導にかかわるこうしたヒントは、今後も継続して収集し、機会あるごとに、大学の構成員にフィードバックしていく予定である。なお、「FDガイド」の各号の末尾には、それぞれのテーマについての理解を深める上で参考になる文献も紹介されている。また、「FDガイド」を綴じるための専用のファイルも配布されている。

まだ発行が開始されたばかりの「鹿大版FDガイド」だが、今後長期的に継続され、鹿児島大学教員のFD活動にとってよりいっそう有益なものへと発展することが望まれる。



第2号

第3号

共通教育における学習実態調査・学習成果に関する2010年度報告及び2011年度調査

1. はじめに

教育職員、事務職員・技術職員(以下、教員、職員と記述する)、そして、大学生は、本学を構成する重要なメンバーと考えられ、教員と職員に関しては、資質向上を目的としたFD活動やSD活動がそれぞれ継続されている。一方、学生に関しても、学部や学科単位で学生の資質向上のための取り組みが個別に行われているが、鹿児島大学の全学部学生の資質向上を目的とした取り組みは少なかつた。現在、大学は社会から、「大学生の学習の質の向上、あるいは、大学生の資質の向上」を強く求められている。また、大学生自身も自分たちが高等教育でどのような資質(人間力、教養、専門能力)を培って成長しているのかをふりかえりながら学習する必要がある。

そこで、FD活動の一環として、本学2年生(平成21年度入学生)を対象に共通教育における学生の学習実態・学習成果について質問紙調査を2010年度に行った。本調査結果は、「進取の精神」を有する人材を育成するために整備・改善することが必要な要素(カリキュラム・教授法・教育環境整備等)を明らかにし、今後のFD活動や教育改善の展開に貢献することを目的としている。また、2011年度も同様の学習実態調査を継続することになった。以下に、学習実態調査の内容及び結果について概略の報告を行う。なお、本調査結果は、教職員だけでなく、アンケートに参加した学生にも公開しており、学生自身の学習改善にもつながるものである。

2. 実施方法

FD委員会で、アンケート案および実施スケジュールおよび効果的な回収方法などに関して審議を行った。その結果、実施スケジュールは、(1)2010年12月末調査票を各学部へ送付、(2)2011年1月初旬調査票を学生に配付、(3)2011年1月21日(金)学生提出締切、(4)2011年1月25日(火)回収分を教育推進係へ提出と設定した。そして、アンケート項目は以下のように設定した。

問1 最初に、以下の基本項目についてお答えください。

学籍番号(10桁の数字で記入)

- 出身高校の種類
- 入学前の1日学習時間
- 高校での成績
- 鹿大入試のでき具合
- 鹿大への入学志望順位
- 現在の所属学部・学科への入学志望順位

問2 次のことは、あなた自身の日頃の行動・習慣・考えにどれくらいあてはまりますか。

[大学内外での行動]

- 授業にはきちんと出席している
- 単位の取りやすい授業を受講するようにしている
- クラブ・サークル活動に力を入れている
- アルバイトに力を入れている
- ボランティア活動によく参加している

[習慣・関心]

- 毎日、新聞に目を通すようにしている
- 読書をするように心がけている
- 政治や経済などの社会の動きに関心がある
- 日頃、心身の健康に気をつけている

[鹿大在学中の抱負]

- 広く教養を身につけたい
- 専門的な知識・技能を身につけたい
- できる限り多くの資格を取得したい
- 国際感覚を身につけたい
- 海外留学を経験したい
- できる限り人脈を広げたい

〔あなた自身〕

- 自分に自信がある
- 鹿大生であることに誇りを感じている
- 自分の将来に対して不安がある
- 将来就きたい職業がはっきりしている

問3 ①あなたは、次の共通教育科目を受講しましたか。

②「(受講)した」ことがある場合、1回(90分)の授業に対して予習・復習に平均でどれくらいの時間を使いましたか。

- 教養科目
- 情報科学科目
- 外国語(英語)
- 外国語(英語以外)
- 体育・健康科目
- 基礎教育科目

問4 ①あなたは、共通教育科目の授業に関して、次のような学習をしましたか。

②「した」ことがある場合、その学習方法はあなた自身の習慣として身についたと思いますか。

- シラバスを参考に、次の授業内容について予習する
- 授業中、板書以外もノートを取る
- 授業後のノートの見直しや整理をする
- 授業でわからなかったところを先生に質問する
- 授業でわからなかったところを自分で調べる
- 授業で興味をもったことを自分でさらに学習する
- 授業で配布された資料はきちんと整理・保管する
- 授業で出された宿題や課題を必ずこなす

問5 ①あなたは、共通教育において、次のような授業を受講しましたか。

②「(受講)した」ことがある場合、そうした授業はあなたが知識や能力を獲得するのに役に立ったと思いますか。

- 教員による一方向の講義が中心の授業
- ディスカッションを取り入れた双方向型の授業
- 受講生による発表が中心の授業
- グループワークが多い授業
- 実習・実験・調査が中心の授業
- 練習や問題を解く作業が多い授業
- 宿題が多く出される授業
- PCやMoodleを利用する授業

問6 ①あなたは、共通教育において、次のようなことを経験しましたか。

②「(経験)した」ことがある場合、それによってあなたの学習動機(もっと学習したいという気持ち)は高まりましたか。

- 少人数クラスで議論を行った
- 授業で教員からよく質問や問いかけがなされた
- オフィスアワー等で教員に質問し、問題を解決した
- レポートの書き方や図書館の利用方法について学んだ
- レポートや答案などを教員からコメント付きで返却してもらった
- 授業で毎回、ミニツツ・ペーパー(感想・意見・質問等)を書いた
- 授業で毎回、小テストがあった
- 各学期の最後に、学んだ内容や成果について振り返りを行った
- 授業で合宿があり、参加した
- 授業で地域社会の人と交流した
- 授業で他学部や他大学の学生と交流した
- 授業でゲスト・スピーカー(外部講師)による講義を受けた
- 短期の海外研修に参加した
- 院生やティーチング・アシスタント(TA)から助言を受けた
- 授業とは別に、友達同士で勉強会(自主ゼミ)を開催した

問7 ①あなたは、共通教育を通して、次の能力が入学時点と比べてどのように変化したと思いますか。

②「伸びた」という場合、どの共通教育科目が役に立ったと思いますか。(複数回答可)。

教養科目 情報科学科目 外国語(英語) 外国語(英語以外) 体育・健康科目 基礎教育科目

- 文章を読んだり書いたりする力
- 外国語を読み・書き・話し・聴く力
- 異なる考え方・価値観を理解する力
- 物事を数量的に分析して考える力
- 他者と協調して目標を実現する力
- 自ら進んで新しいことに挑戦する力
- 自主的・自律的に学ぼうとする力
- 人前で自分の意見・考えを発表する力
- 情報を収集・分析して活用する力
- 物事を論理的・多面的に考える力
- 問題を発見・分析して解決する力
- 社会規範に従って行動する力
- 複数の人をまとめて作業を行う力

問8 あなたは、共通教育の授業を通して、次の知識・技能・態度がどれほど身についたと思いますか。

- 大学で教育を受けるのに必要な学習技能
- 人類の社会・文化・歴史・思想に関する知識・態度
- 自然・環境・生命に関する知識・態度
- 科学技術・数理に関する知識・技能・態度
- 異なった文化・言語に関する知識・技能・態度
- 人間性・社会性・倫理観に関する知識・態度
- 自らの専門分野に関連した基礎的知識・技能

問9 あなたは、今学期(4期)中、以下の活動について 1 週間あたり平均してどれくらいの時間を使いましたか。

- 授業に関係した学習(※学部での専門教育も含む)
- 友人等とのつきあい
- アルバイト
- 授業とは関係のない学習
- クラブ・サークル活動
- ボランティア

問10 あなたは、鹿兒島大学に学んでいて、次のことについてどのように思いますか。

- 教室の設備が整っていて勉強がしやすい
- 図書館や情報端末室が充実していて使いやすい
- 困ったことがあるとき相談できる体制が整っている
- 教員や職員は親切に対応してくれる
- 鹿兒島大学ではクラブ・サークル活動が活発である
- 鹿兒島大学は常に新しいことに挑戦している
- 鹿兒島大学は開放的で活気がある
- 鹿兒島大学は地域の発展に貢献している
- 鹿兒島大学は国際性が豊かである

問11 鹿兒島大学が提供する共通教育等について、希望することがあれば自由に書いてください。

3. 学習実態調査(2010)結果の概要

本アンケート結果に関しては、FD委員会で審議し、その後、教職員およびアンケート参加学生に公開しているので、その概要について報告する。

まず、アンケートの回収状況は学部により多少の差はあるが、概ね当初目標のアンケート回収率8割に近いものであった。

調査対象者

学 部	有効回答者数/2年生(H21年度入学)	有効回答率
法文学部	325 / 410	79.3%
教育学部	220 / 288	76.4%
理学部	138 / 187	73.8%
医学部	194 / 214	90.7%
歯学部	51 / 54	94.4%
工学部	321 / 398	80.7%
農学部	202 / 245	82.4%
水産学部	93 / 140	66.4%
合 計	1544 / 1936	79.8%

注)各項目の内訳の総和が回答者数より少ない分は当該項目への未記入者を示している。

大学入学前の状況に関する質問に関しては、図1の結果が得られた。この図から、基本的に本学学生が、高校在籍中は熱心に学習し、まじめで成績も良かったことが分かる。そして、鹿児島大学が第1志望だった学生は57%で、所属学部・学科に関しては75%が第1志望だったと回答しているので、過半数の学生に関しては志望に沿った学生であるが、所属学部・学科に関しては1/4程度は第一志望でなかった学生であるという事を勘案した入学時の指導が必要となることが分かる。

図1：入学前の学習状況と入試の状況

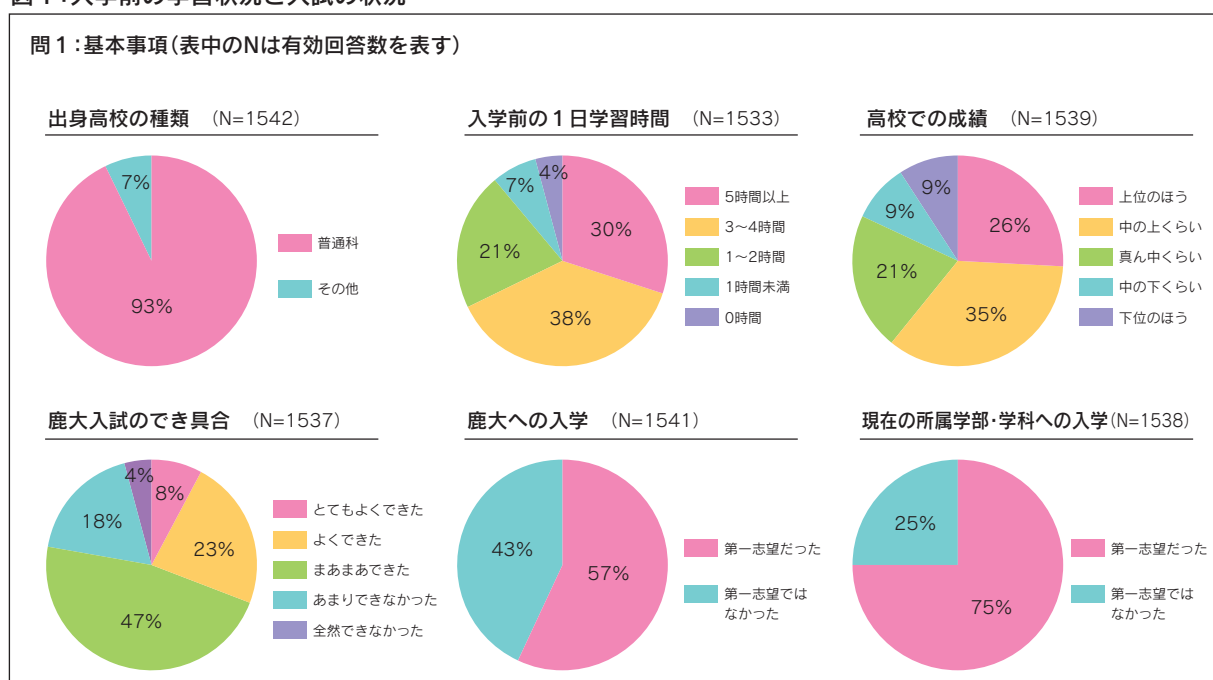


図2に学生がどのような日常生活を行っているのかを示す。特筆すべきことは、FD活動があまり盛んでなかった1980年代や1990年代の学生と比較して、9割を超えるほとんどの学生が授業にまじめに出席している事が分かる。しかし、学習の質という観点からは、単位の取りやすい授業を受講するようにしているとする割合が高く、個々の資質や能力を高める観点から受講をすべきとの教育的な指導が必要なことが分かる。また、近年、学生の人間力の向上に関して正課外活動が果たす効果が重要視されつつあるが、正課外活動への参加については、クラブやサークル活動が56%、ボランティア活動は約15%にとどまっている。また、アルバイトに関しては約58%の学生が力を入れていると回答しており、大学として経済的な支援が必要なことが分かる。

図2:大学内外での活動状況

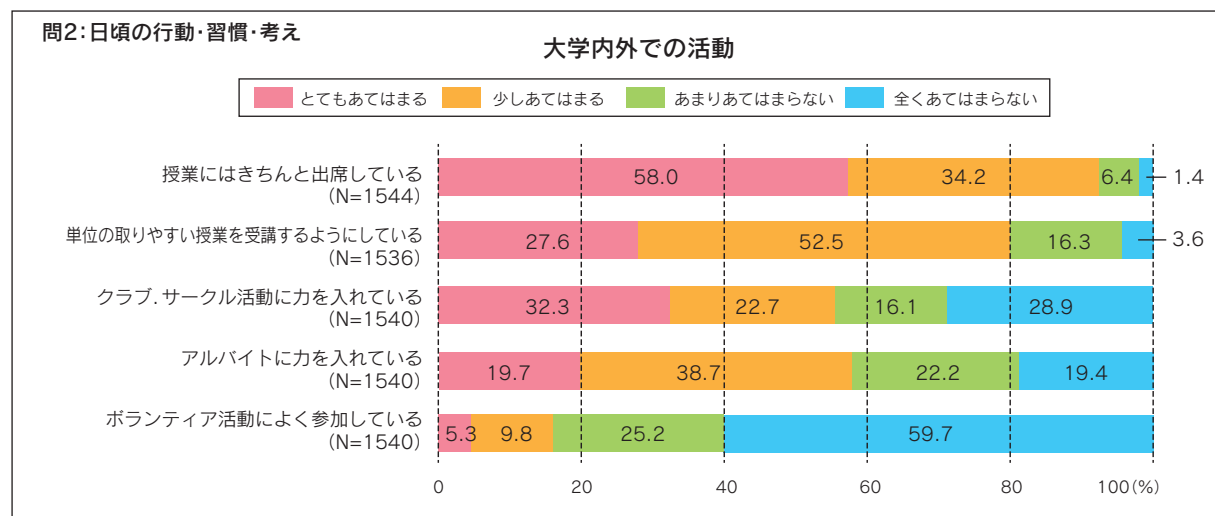


図3に学習時間(予習・復習)の状況を示す。この結果は、図1に示す入学前の学習時間と比較すると、より高度な内容を学ぶべき大学生2年次のほうが高校在学時よりも急激に授業以外の学習時間が低下している事を示している。また、規則上は講義1.5時間に対してはその2倍の自学自習(予習・復習)が求められているにも関わらず、実際の学習時間が短すぎることが大きな問題点として示されている。

図3:学習時間(予習・復習)の状況

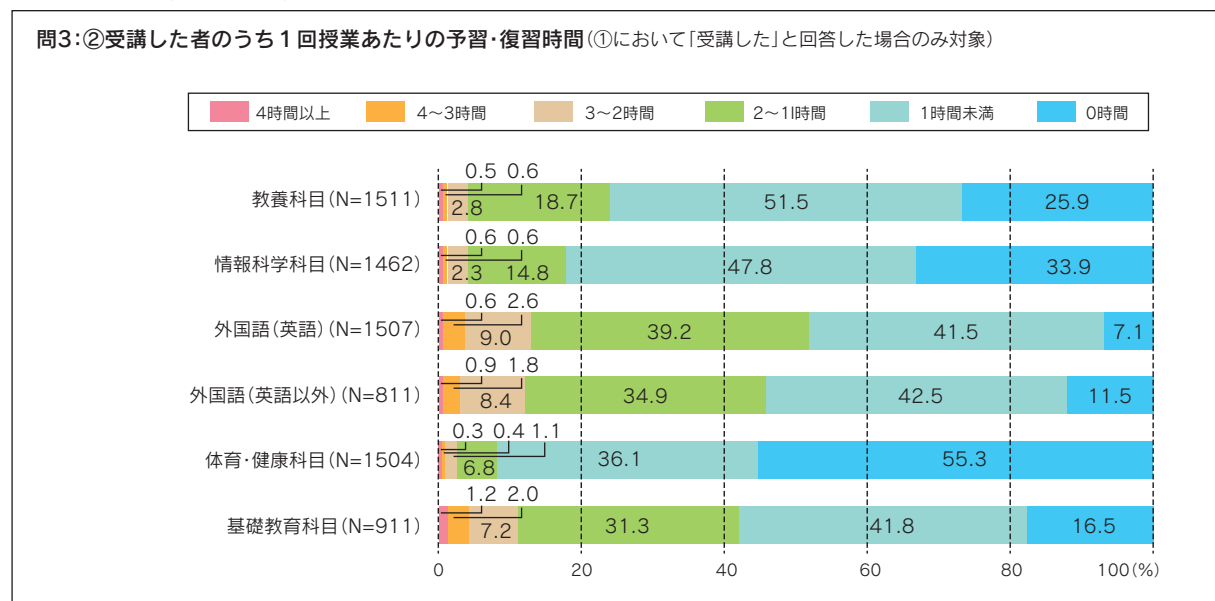


図4に授業形態による知識や能力の獲得状況を示す。図3に示す様に、学習内容を理解するための予習・復習がほぼ機能していない状況では、学生は授業に出席するだけで内容がほぼ理解できる授業形態を求めている可能性が高い。一方、FD活動により教員側の意識は変化しているとはいえ、教科書や資料を用いて学生に講義内容を教授する座学スタイルの講義が基本と考える教員は依然として多い。したがって、教員による一方的な授業をほとんどの学生は経験している。しかし、この授業形態から知識・能力を獲得したと積極的に評価する学生は約15%にとどまっており、他の授業形態と比べると評価が低い。一方、実験・調査中心の体験型の授業では、約半数の学生が知識・能力の獲得につながったと感じている。したがって、学生にとっては未知で抽象的な内容を抽象的に教えるというのではなく、学生にとっては未知なものでも、具体的な体験などをとおして具体的に教えるなどの工夫が必要なのことが分かる。

図4: 授業形態による知識や能力の獲得

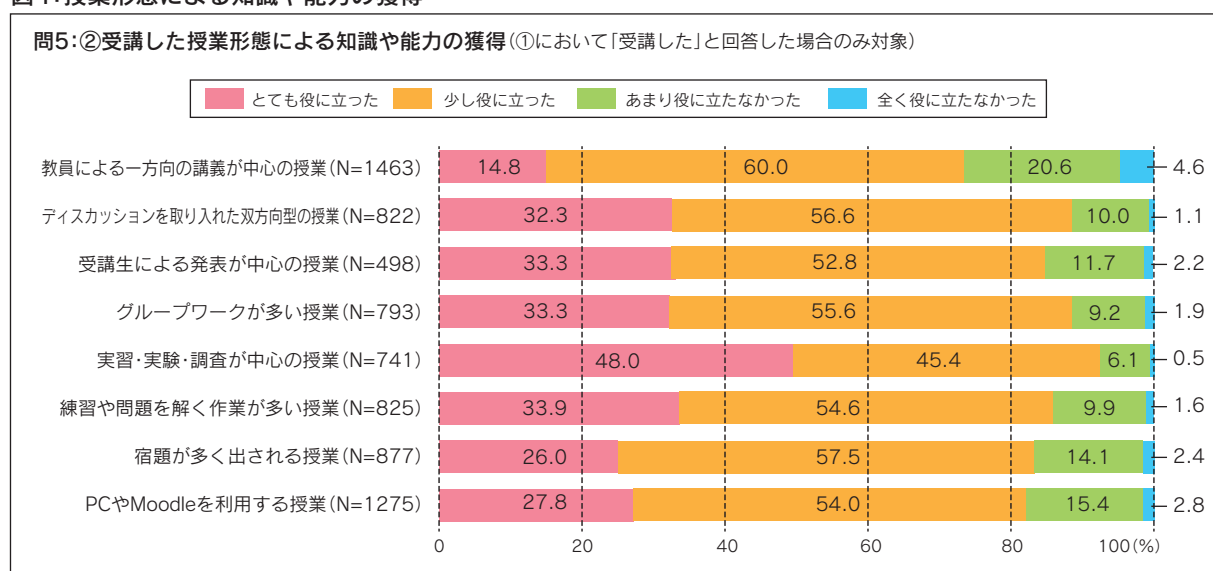


図5に大学教育で培った能力に関する質問の回答結果を示す。特に、情報収集・分析能力や、異なる考え方・価値観に対する理解力が高まったとする回答が多くみられた。全般的に変化を実感していない能力が多いものの、能力が落ちたと評価する学生より、伸びたと評価する学生の方が多い。ただし、どちらともいえないと回答した学生が最も多いので、このように回答した学生のより多くが「伸びた」と回答できるような効果的な教育改善・改革が必要である。

図5: 共通教育で入学時点と比べて変化した能力

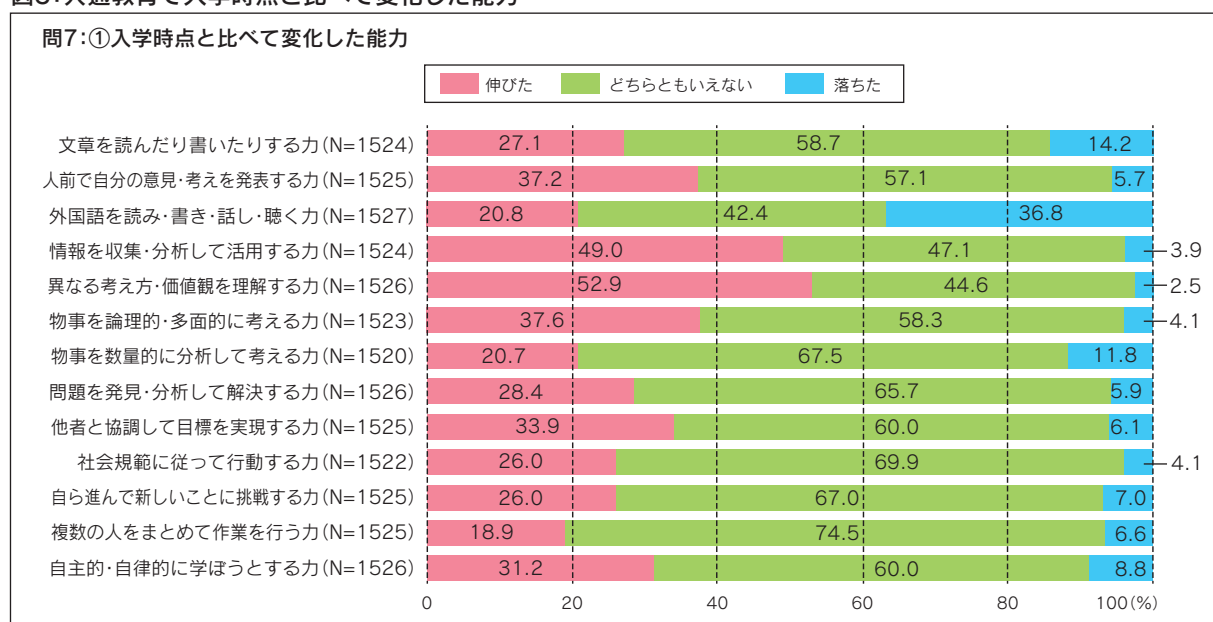
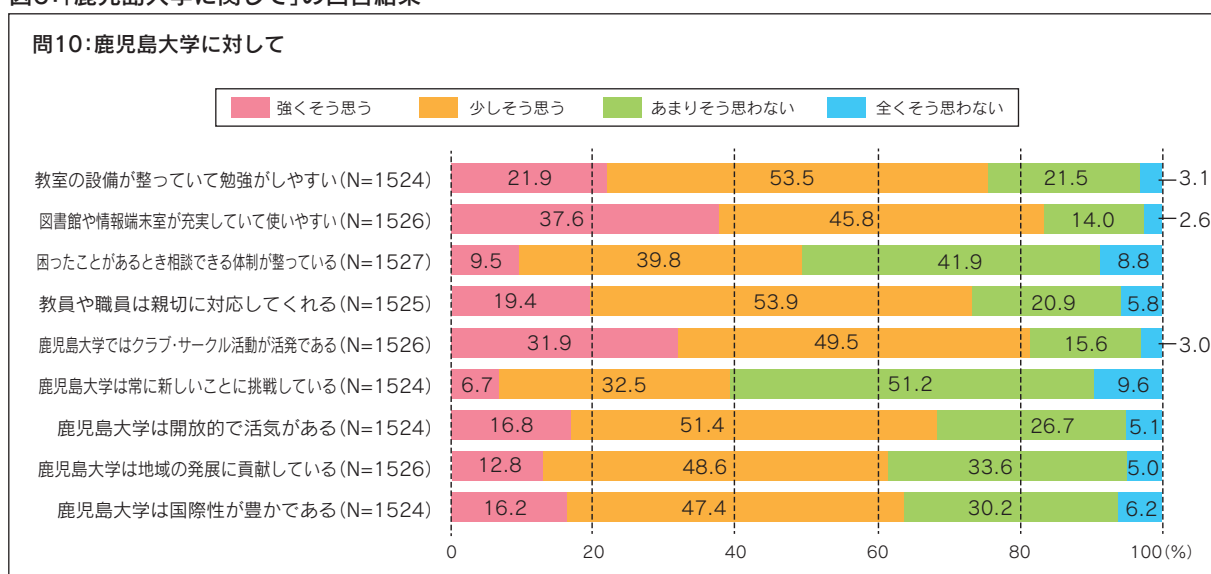


図6に「鹿兒島大学に対して」の回答結果を示す。図書館や情報端末室をはじめとして、施設設備に対する満足度は比較的高い。また、クラブ・サークル活動についても活発だと考えられている。しかし、相談体制の整備に対する満足度は低く、また、鹿兒島大学が新しいことに常にチャレンジしていると考えている割合も非常に低いことが分かる。鹿兒島大学はすごい(素晴らしい)大学であると実感してもらうことは学習動機として重要である。学生の評価が低い項目は、実際に改善していかなければならないことであるが、実態がそうであるというよりも学生にうまく広報されていない可能性も高いので、在学生向けに大学のイメージを高める効果的な広報活動も必要と考えられる。

図6:「鹿兒島大学に関して」の回答結果



4. まとめ

学習実態・学習成果に関する調査(2010)について概略の報告を行った。詳細に関しては報告書を参考にしううえで、教育センターおよび各学部で教育改善に役立てていただくように願っている。また、本調査は、学生の学習状況を知るうえで有効であることが分かったので、2011年度も2010年度の内容をほぼ踏襲する形で継続することになった。

なお、本調査は大学側だけでなく、学生側にも有益な内容を含んでいるために、アンケートに参加した学生に対して、調査結果だけでなく、以下のような「メッセージ」もつけて広報したことを記しておく。メッセージの内容は、鹿兒島大学の全学生に対しても有益な内容であるだけでなく、これから鹿兒島大学に入学する学生に対しても非常に有益なものと考えられるので、今後、入学時の履修指導だけでなく、各学期末での履修指導にも積極的に利用していただければ幸いである。

～学生さんへのメッセージ～

はじめに

2011年1～2月にわたり、当時2年生だったみなさんが回答した結果がまとまりましたので、ここにお知らせします。この結果を、現在の大学生生活を振り返り、これから卒業までの大学生活の一層の充実を目指して活かして欲しいと思います。

大学を取り巻く社会の変化

大学および大学生に対する社会の視線は年を追うごとに厳しいものとなっています。就職事情の厳しさについては、既にみなさんも感じ始めていることでしょう。しかし、問題はむしろその後です。卒業後の社会では、即戦力として活躍することが求められます。現状を的確に把握して問題を発見し、その解決方法を考え出すこと、周囲の人びとと協力して物事に取り組み、課題解決に向かって行動していくこと、すなわち一步を踏み出す力が要求されます。また、技術革新や社会情勢の急速な変化に対応できるよう、自ら進んで能力を高めることのできる力(進取の精神)が、以前にもまして重視されるようになっていきます。このような力を大学生の間に身につけたかどうか問われるのです。

浮かび上がる鹿大生像

今回の調査結果から浮かび上がった鹿大生に多くみられる特徴は、以下のようなものでした。自分自身を振り返ってみて、当てはまると思いますか。

- 高校までに一定の学習習慣を身につけたうえで入学し、まじめに授業に出席している
- 自主的な学習活動や読書、ボランティア活動への参加などにはあまり積極的とはいえない
- 入学後の学習時間の短さや能力の伸長が不十分な現状を、ある程度自覚している

みなさんへの提案

[毎日の過ごし方を少し変える]→ちょっとだけ積極的に動いてみよう！

- 授業後、オフィスアワーを利用し、教員に質問してみる
- 図書館に行って、新聞に目を通す。読む本について職員に相談してみる
- ボランティア支援センターに登録し、ボランティア活動に参加してみる

[大学以外の世界にも目を向けよう！]

- 教室外の活動(野外活動・地域との交流・合宿型)がある授業を受講してみる
- 短期海外研修を含む授業に参加してみる(費用支援制度あり)
- 大学関係者以外の方と交流を持とう(ボランティア活動、課外活動)

おわりに

今すぐにできることはいくつもあります。今の自分自身を少し変えるために何が必要でしょうか。この調査の結果が、みなさんが大学生としてこれからの毎日をどう過ごしていくか、大学生としてどうあるべきかを考えるきっかけになることを願っています。

教育・学生支援担当教職員講習会 (新入生オリエンテーション説明者講習会)の報告

1. はじめに

本講習会は、新入生の支援に携わる教職員を対象として、履修制度をはじめとする共通教育の仕組みについて理解するとともに、特別支援教育の専門家の講演や本学保健管理センターの取り組み報告を聞くことにより、多様な学生に対する理解を深め、対応のために必要な基礎的な知識を習得することを目的として、平成24年3月27日(火)13:30より開催された。出席者は118名で、盛況であった。

2. プログラム

プログラムは以下のとおりで、田川まさみFD委員の司会で進行された。

時間	内容	担当
13:30~13:35	開会挨拶	阿部 美紀子 (FD委員会委員長、教育担当理事)
13:35~14:45(70分)	発達障害のある学生とその支援 ~知らないと困る、ちょっと変わった学生への対応~	講師:徳永 豊 (福岡大学人文学部 教育・臨床心理学科教授)
14:45~14:55(10分)	講演に関する質疑応答	
14:55~15:15(20分)	保健管理センターの学生支援体制について	講師:伊地知 信二 (保健管理センター所長)
15:15~15:20	休憩	
15:20~16:20(60分)	共通教育の履修について (新入生オリエンテーション説明内容)	中島あや子 (教育センター共通教育企画実施部長) 共通教育係 職員
16:20~16:30(10分)	共通教育に関する質疑応答	
16:30	閉会	門 久義 (教育センター長)

(1)プログラム前半の講演について

最初に、阿部 美紀子FD委員会委員長(教育担当理事)から、開会の挨拶があり、続けて、福岡大学人文学部の徳永 豊先生から、「発達障害のある学生とその支援」~知らないと困る、ちょっと変わった学生への対応~と題した講演があった。徳永先生は、特別支援教育の専門家であり、様々な事例を挙げながら「発達障害」について分かりやすく説明いただいた。

発達障害には、高機能自閉症(自閉症のうち、知的発達に遅れを伴わないもの)、ADHD(注意欠陥・多動性障害)、LD(聞く、話す、読む、書く、計算する、推論する能力のうち特定のものの習得と使用に著しい困難を示す学習障害)などがあり、それぞれの特徴を知り理解することの重要性が指摘された。また、これらの障害は、障害というよりも「気質・特徴」としてとらえるべきで、現状では完治する方法はなく、どう周りにつきあうかが重要となる。基本的には、病的な脳機能の不全であり、本人に責任はない。育て方も原因ではない。知的機能は平均または平均以上であり、このような特徴を持った学生を理解し支援することが必要である。小・中学校での調査では、6.3%程度の在籍率という数字が出ており、すでに支援を受けている子供たちが大学に入学してきている現状である。

徳永先生は、「発達障害のある学生の困難さと支援のとらえ方」のイメージ図として、グラウンドで野球をしている子供たちのイラストを示され、通常の学生は通常のきれいなグラウンドで野球を楽しんでいるが、発達障害のある学生の周りには、大小様々の大きさの岩がゴロゴロころがっていて、野球ができず途方に暮れている子供の姿が描かれていた。彼らの行動を困難にしているこのゴロゴロころがっている岩が、我々教員に見えるか？また、その岩を丹念に取り除いてゆけるか？ 個々の局面での教員の努力と大学の組織としての体制の整備が必要である。

徳永先生の講演に引き続いて、本学保健管理センター所長の伊地知 信二先生より、「保健管理センターの学生支援体制について」と題する講演があった。近年、保健管理センターの3本柱の事業のうち、Diversity Managementへの比重が高まり、まさに徳永先生の指摘が鹿児島大学でも大きな課題になってきていることが裏付けられた。学生へのカウンセリング、イベントの企画による学生支援、毎朝学生に電話して登校を促すモーニングコール、アパートへ迎えに行ったり、管理センタースペースでの学習支援、就職支援・コミュニケーションスキルアップのための面接対策の指導、学生のピアサポートによるレポート作成支援の試行、等々、数々の取り組みをされていることが紹介された。

筆者の学科でも毎年のように問題を抱えて苦しむ学生さんが在籍し、保健管理センターの先生方やスタッフのみなさんには、本当にお世話になっている現状であり、教員がどのように対処したら良いかを専門的な立場から助言していただけるのは、当該の学生さんにはもちろんのこと、我々教員にも対応の拠り所になっている本当にありがたい存在であると感じている。その仕事の大変さは想像に難くないところであり、やはり大学の組織的なさらなる体制作りが急務と考えられた。

(2)プログラム後半の「共通教育の履修について(新生オリエンテーション説明内容)」について

休息を挟んで、後半は、新生担当教員向けに、この4月から入学する新生に対する共通教育の履修およびネットによる履修申請の方法などの説明が行われた。中島 あや子教育センター共通教育企画実施部長から、挨拶と概要の説明の後、共通教育系の職員からの資料と実際のネット入力を用いた説明が行われた。複雑な内容を、分かりやすく説明されていた。その後、質疑応答の時間が取られ、新生担当教員からの具体的な質問や指摘があった。すべてのプログラムの終了後、最後に、門 久義教育センター長より締めくくりの挨拶があり、ほぼ予定どおりに閉会した。

3. まとめ

今回の「平成23年度 教育・学生支援担当教職員講習会(新生オリエンテーション説明者講習会)」では、近年その傾向が著しい「学生の多様化」に対応しなければならない大学において、具体的な課題としての「発達障害とその支援」について、その理解を深める良いきっかけが提供されたと思われる。また、後半部では、本学の新生に対する履修説明のポイントが集約的に解説され、意義のある講習会であったと思われる。

教育センター高等教育研究開発部(共通教育)のFD活動

1. はじめに

平成23年度の共通教育に関するFD活動を行うに当たり、昨年からの引き継ぎ事項として、①共通教育における授業アンケートの改定(授業改善に資するアンケート(期末)案の検討、中間授業アンケート及び授業改善報告書の改定)、②授業アンケートの実施と結果の開示、③授業アンケートにおけるMoodleの活用率向上のための検討、④授業アンケート・授業改善報告書の結果を基にした教育の成果・効果の検証と教育改善の推進、⑤共通教育の授業公開・授業参観の企画・実施、⑥教育センターオープンクラスの企画・実施、⑦大学地域コンソーシアム鹿児島と連携したFD活動への参加という項目が挙げられていた。これらの事項を念頭においた上で、平成23年度の活動として、昨年と同様に、各期において受講生を対象としたアンケート調査「中間授業アンケート」と学期末「授業改善に資するアンケート」(授業評価アンケート)、授業担当者には学期末「授業改善に資するアンケート」の調査結果を踏まえた授業改善メモ(報告書)の提出を求めた。また、学内の教員を対象とした共通教育科目の授業公開・授業参観の企画と実施およびアンケート調査を行った。さらに、後期の共通教育科目の授業公開・授業参観の実施期間中に、新任教員を対象としたFD委員会主催の新任教員FD研修会の一環として授業参観を併せて実施した。また、10月には、学外者を対象としたオープンクラスを実施し、授業見学と施設見学を行った。

中間授業アンケートに関しては従来の質問紙による調査方法からMoodleを活用した調査を推奨し、その実施率についてのデータの蓄積を行った。学期末授業評価アンケートとオープンクラスの企画・実施については、それぞれ部会委員でワーキンググループを組織し、内容の充実に向けて取り組んできた。特に、学期末授業評価アンケートに関しては、前年度に授業改善に資することを主な観点とした新しいアンケートの作成と実施を目指して作成した原案を引き継ぎ、「授業改善に資するアンケート」に改定した。併せて、中間授業アンケート、授業改善メモ等についても質問項目や様式を検討し、「授業改善に資するアンケート」と連動した形で、より教員の授業改善に役立ててもらえるよう改定した。

今年度は、前年度に本部会で実施された企画を踏襲しながら、若干の工夫や新しい試みを行いながら実施した。ここでは、企画の実施内容およびアンケートの結果について報告する。

2. 中間授業アンケート

学生への中間授業アンケートは、前期は5月19日、後期は11月14日から約1カ月間、授業担当者に依頼して実施した。中間授業アンケートは、その結果を受講している学生に反映することを考慮に入れて授業期間の途中に行われているものであり、また、自由記述の欄が設けられているものの質問内容が短く、回答形式がチェックによるものであることから、入力、集計を行うにあたりMoodleが有効に活用できる。教育センターでは、中間授業アンケートの実施にはMoodleを活用することを推奨しており、昨年後期からアンケートの方法別に実施状況を調べている。平成21年度～平成23年度の実施状況について後期に関して比較した結果を表1に示す。今年度は教育センターで用意したアンケート用紙を使用した担当者の授業数は平成22年度と比較して34科目増加し、アンケート用紙の配布数も平成21年度16,980枚、平成22年度10,443枚、平成23年度16,544枚と増加していた。一方、Moodleを活用した授業は平成21年度47科目、平成22年度81科目、平成23年度48科目となっており、平成22年度と比較すると33科目の減となっている。全科目数から考えると、紙媒体を使用している授業担当者の割合も7割から8割に増えている。Moodleへの移行が望まれるが、現状では、アンケートをMoodleで実施すると学生からの回答が得られにくい傾向があるので、今後、アンケートの実施方法や、Moodleで実施した際の学生の回答を促すなど方策を検討する必要がある。

表1 中間授業アンケートの実施方法

実施方法	平成21年度(後期)		平成22年度(後期)		平成23年度(後期)	
	科目数	割合(%)	科目数	割合(%)	科目数	割合(%)
教育センターのアンケート用紙 (配布用紙数)	328	84.8 (16,980)	273	70.7 (10,443)	307	85.51 (16,544)
教員独自の用紙	10	2.6	23	6.0	1	0.28
moodleでの実施	47	12.1	81	21.0	48	13.37
その他	2	0.5	9	2.3	3	0.84
計	387	100.0	386	100.0	359	100.0

3. 授業公開・授業参観

(1)学内の授業公開・授業参観

学内教員に対する共通教育科目の授業公開・授業参観を、前期は6月20日(月)～7月1日(金)に、後期は10月31日(月)～11月30日(水)に実施した。前期は、参加者がのべ16名で、参観の行われた科目数は、教養科目3科目(うち推奨科目1科目)、外国語科目2科目(うち推奨科目1科目)、基礎教育科目7科目(うち推奨科目3科目)、開放科目2科目(担当教員の下)の計14科目であった。

後期は、参加者がのべ11名で、参観の行われた科目数は、教養科目1科目(うち推奨科目1科目)、外国語科目2科目(うち推奨科目1科目)、基礎教育科目5科目(うち推奨科目2科目)の計8科目であった。11名のうち6名は新任教員FD研修会の一環である授業参観への参加者であり、それ以外の共通教育科目の授業参観者は前期と比べ11名減となった。前年度当該期に実施した学生の授業アンケート結果を基に推奨科目を提示しているが、参観された授業の約半数は推奨科目であった。

4. 教育センターオープンクラス

(1)オープンクラスの概要と実施状況

オープンクラスは高校生以上の一般市民を対象として、共通教育の授業および学内の施設を学外に広く公開し、本学の教育活動全体を市民の視点から点検してもらうことによって教育改善を図ることを目的として実施している。平成23年度は、10月17日(月)～10月22日(土)に開催した。

事前準備および企画・実施にあたり、ワーキンググループを組織してオープンクラス企画会議を1回開催し、高等教育研究開発部会に提案する内容の検討を行った。参加者の募集に当たっては、ポスターを作成し、南日本リビング新聞社および南日本新聞「みなみのカレンダー」への掲載依頼、市内書店店舗、鹿児島市内公共施設および高校へのポスターの送付、各学部へのポスター掲示の依頼と大学ホームページへの掲載、さらに昨年参加者へのダイレクトメールの送付等を行った。また、今年度も学生ボランティアを募集し、オープンクラス参加者と学生が触れ合う機会を設け、大学の状況をより深く知ってもらえるよう配慮し、参加者から好評であった。募集に当たり、ボランティア支援センターの協力をいただいた他、各学部へ募集案内の掲示依頼、ボランティアサークルへの依頼、ボランティアに登録している学生へのメール配信等を行った。中央図書館、水産学部練習船「南星丸」、総合研究博物館、キャンパス史跡めぐり、北辰蔵の施設見学は、担当の教職員に説明を依頼した。また、最終日には、生協中央食堂を

会場として昼食をとりながら学生ボランティアを含めた交流会を企画した。

平成23年度の公開授業科目は329科目で、うち51科目に見学申込があり、31名の参加者があった。また、新たに水産学部練習船「南星丸」の見学を企画したのに加え、本学郡元キャンパス内の主な施設見学日として10月22日(土)を設定した(表2参照)。参加者数は中央図書館3名、南星丸12名、総合研究博物館11名、キャンパス史跡めぐり12名、北辰蔵17名であり、部会委員及び学生ボランティアも同行し、担当の教職員から各施設および史跡について説明を受けた。生協中央食堂で行った交流会では、部会委員・教職員11名と学生9名、参加者11名(うち8名は高校生)との懇談が和やかに行われ、後半は参加者から本企画および本学に対して意見が述べられた。なお、週末にも関わらず協力していただいた教職員、ボランティア学生に紙面を借りて感謝する次第である。

表2 オープンクラス施設見学時間割

	10/17(月)	10/18(火)	10/19(水)		10/20(木)	10/21(金)		10/22(土)
1時限	授業1	授業1	授業1		授業1	授業1		9:30~10:30 総合研究博物館見学 10:30~11:30 キャンパス史跡めぐり 11:30~12:00 北辰蔵見学 12:15~13:30 学生・教員との交流会
2時限	授業2	授業2	授業2		授業2	授業2		
昼休み								
3時限	授業3	授業3	授業3	13:30~ 中央図書館	授業3	授業3	13:30 }	
4時限	授業4	授業4	授業4		授業4	授業4	16:00 南星丸	
5時限	授業5	授業5	授業5		授業5	授業5		

(2)オープンクラスに関するアンケート調査の結果

一般市民参加者46名のうち、アンケート提出者は41名であった。授業見学アンケートを提出した授業担当教員は22名であった。

参加者を対象としたアンケートより、本行事を知った契機については、新聞3名、公共機関等へのポスター7名、高校への案内14名、ホームページ2名、ダイレクトメール14名、情報誌0名、その他5名(知人の紹介、インフォメーションセンター)であった(複数回答)。今年度は施設見学を土曜日に設定したことについて、「土曜日がよい」15名、「日曜日がよい」1名、「平日に組んでほしい」9名、「その他」13名、未回答3名であった。「その他」の回答としては、「いつでもいい」、「どの日が良いとは決められない」等があった。これからも参加したいかという質問に対して23名が「積極的に参加したい」、18名が「時間があれば参加したい」と答えていた。参加の理由として、「次回の公開授業の参考にしたい」、「鹿大受験前に教授や学生の話を知りたいと思った」、「編集を希望しており、学内の雰囲気を知りたいと思った」、「科目自体に対する興味があった」、「鹿大、学内施設、講義への興味があった」、「知人に紹介された」等が挙げられていた。自由記述では、「学生の皆さんが熱心に勉強していて素晴らしかった。また参加したい」、「大学の授業の進み方等がよく分かった」、「社会と大学がどのように関係していくのか、オープンクラスを通じて知ることができ、よい企画だと思う」、「継続して授業を受けられたらいいと思う」、「学びたいときに自由に参加できるのがいい」、「南星丸に乗船できて貴重な経験だった」等の意見が記されていた。参加の理由は大学に対する興味や個人的な大学での生涯学習につながる企画として捉えている参加者に加え、受験(編入)前に学内の雰囲気を知りたいと希望する内容もみられた。さらに、大学の施設や環境整備に触れた内容も書かれていた。また、最終日の交流会においても参

加者から参観した授業に対する意見も出され、学内のアンケートでは得られ難い市民の視点からの意見を聞く機会となった。授業見学については、51科目に対して見学希望があり、44科目に対してアンケートが提出された。

授業担当者に対してもアンケートの提出を依頼し、3項目の質問について、記述による回答を求めたところ、22名の授業担当者からアンケートが提出され、以下のような結果となった。

①一般見学者を授業に受け入れて、授業を行う上で工夫(配慮)した点

アンケートに回答した教員の6割近くが、一般見学者に対し何らかの工夫(配慮)を行っており、その内容としては、「前回の授業の振り返りをした」2名、「授業の前後に見学者と懇談(説明)した」4名、「TAを配置した」3名、「資料を配付した」6名、「その他特別な配慮を行った」5名となった。これらの工夫は、今後も継続していただきたいと思われる。

②オープンクラス授業見学への意見

- 大学の授業を広く一般に公開する試みはよい
- (参加者が)少数のときは特に問題にならない
- 学生の態度についての意見をもらい、参考になった
- 社会人がクラスの中になると、学生にとって良い緊張感になる
- 聴講する理由に関心がある
- よい試みだが、他方で受講生の態度が悪いということで、学外からの一般聴講者に対して恥ずかしいという側面がある
- 今後、より多くの見学者が増えることを期待する。一般人に大学を「地域の力」として活用していただきたい
- 市民に本学の教育活動を知ってもらうよう努めることは、鹿児島大学の使命であり、さらなる推進が望まれる。
- フィードバックをもらうことで多くを学べる。
- 参加者に特別に配慮する必要がなく、参加した回だけで独立して聞ける構成の授業であれば、教員側にも負担がなく、学生にとっても支障はない。
- オープンクラスのために授業内容の変更が必要なもの、1回では理解しにくい授業では、まとまった授業があるならば、別の形態(市民講座)で実施した方がよい
- 事前に連絡された見学者の情報が錯綜していた
- 見学者アンケートの意図が不明確なため、授業改善につながらない
- オープンクラス自体の目的が不明瞭
- 見学者の関心が不明
- 1回限りだと、どこまで授業の雰囲気を味わえるか疑問
- TAがいたため手厚く対応できたが、TAが1人であれば3名の見学者に対応するのは困難
- 後期開始1カ月は、講義の準備に加え他の業務も入るため異常に忙しい。精神的に余裕のない時期をねらって授業見学を開催するのはいかがなものか
- 講義形式の授業を見学した方が、大学の雰囲気を知ることができる(情報活用基礎)
- 見学者の目的、意思が理解できれば、対応の方法が色々あるかと思う。例えば、見学終了後に見学者と教員とで懇談を行うなどすると、大学(教員)側も、今の高校生の求めているもの(大学に期待しているもの)がわかるかと思う
- 見学者の意図と講義内容にはミスマッチがあった

③要望・提案等

- 授業環境の点検・整備
- 今回のように、1名程度の受け入れで、半期1回程度の実施であれば問題ない
- 特定の日を実施することはよい
- 講義室の収容に余裕があれば、いつでも見学者の受け入れは可能
- 学生の保護者に聴講してもらった方がよい
- オープンクラスよりはオープンキャンパスを拡充したほうがよいのでは
- オープンキャンパスとのすみ分け
- 見学者のアンケートに、より具体的な項目を提示したほうが、授業改善につながる
- 語学クラスの場合、見学よりも一緒に参加してほしい
- 多くの市民がオープンクラスに参加してもらえるよう、広報をしてもらいたい
- オープンクラスの学内での認知度があまり高くない。開催後のことまで含めて周知した方がよい

5. 新任教員FD研修会

高等教育研究開発部会では、共通教育における教員の資質向上ならびに教育改善を目的として、共通教育科目等の授業公開・授業参観を行っている。鹿児島大学FD委員会は、新任教員に対する授業改善やFDの啓発を目的として、新任教員FD研修会を行っている。その取り組みの中で、平成23年度は、共通教育後期授業公開・授業参観の期間に合わせて、新任教員FD研修会の一環として授業参観を実施した、参観者は7名(専門科目参観者含む)であった。また、参加の内訳は、共通教育6科目と専門1科目であった。

6. 期末授業アンケート(授業改善に資するアンケート)

(1)アンケートの概要

- 期末授業アンケートは、前期まで従来のアンケートを使用し、後期から「授業改善に資するアンケート」として改定したものを使用した。講義用と実験・実習用の2種類がある。
- 前期までの「期末授業評価アンケート」は、設問番号が100番代の項目は受講生自身に関するもの、200番代の項目は授業に関するものである。
- 後期からの「授業改善に資するアンケート」は、より教員の授業改善に役立てられるよう本部会で検討した。また、中間授業アンケートや授業改善メモも、それと連動する形で改定した。
- 各期のアンケートの設問項目を、表3-1-1、表3-1-2、表3-2-1、表3-2-2に示す。また、平成23年度のアンケート調査実施科目数と回答者数を表4に示す。

表3-1-1 授業評価アンケート(講義)の設問項目

設問番号	設問項目(講義用)
Q101	この授業の出席状況を教えてください。
Q102	この授業についてシラバスを読みましたか。
Q103	この科目を意欲的に学ぼうとしましたか。
Q104	<u>この授業について、1コマあたり、どの程度の予習や復習しましたか。(レポート作成を含む)</u>
Q105	<u>授業内容の水準は、あなたにとってどうでしたか。</u>
Q106	この科目の学習目標(シラバスに記載)は、達成できたと思いますか。
Q201	授業内容はシラバスに沿ったものでしたか。
Q202	この授業は将来役立つと思いますか。
Q203	教員の話し方は明瞭で聞きやすく、説明も分かりやすいと思いましたか。
Q204	授業は時間どおりに行われましたか。
Q205	授業に対する教員の熱意を感じましたか。
Q206	<u>使用した教科書や教材は授業の理解に役立ちましたか。</u>
Q207	教員は質問に丁寧に応じてくれましたか。(オフィスアワーを含めて)
Q208	授業期間中に実施したアンケートの結果は、その後の授業に反映されましたか。
Q209	この科目は全体として満足できるものでしたか。

表3-1-2 授業評価アンケート(実験・実習)の設問項目

設問番号	設問項目(実験・実習用)
Q101	この授業の出席状況を教えてください。
Q102	この授業についてシラバスを読みましたか。
Q103	この科目を意欲的に学ぼうとしましたか。
Q104	<u>グループ実験・実習は自ら進んで行いましたか。</u>
Q105	<u>この科目のテーマは、時間内に終了するように設定されていますが、あなたの場合はどうでしたか。</u>
Q106	この科目の学習目標(シラバスに記載)は、達成できたと思いますか。
Q201	実験・実習の内容はシラバスに沿ったものでしたか。
Q202	この実験・実習は将来役立つと思いますか。
Q203	<u>この実験・実習から、講義だけでは理解できないことがあると実感しましたか。</u>
Q204	教員の説明は分かりやすいと思いましたか。
Q205	<u>実験・実習は安全性に十分配慮して行われましたか。</u>
Q206	実験・実習に対する教員の熱意を感じましたか。
Q207	オフィスアワー等で、質問に教員は丁寧に応じてくれましたか。
Q208	授業期間中に実施したアンケートの結果は、その後の実験・実習に反映されましたか。
Q209	この科目は全体として満足できるものでしたか。

※設問番号にアンダーラインのある項目は、講義形式によって特有の設問項目である。調査は共通教育科目の受講生を対象としている。

表3-2-1 授業改善に資するアンケート(講義)の設問項目

設問番号	設問項目(講義用)
Q 1	この授業を選んだ動機は何ですか (この設問のみ複数回答可、次の選択肢から選ぶ) ・シラバスの内容 ・曜日や時間帯 ・必修科目だから ・専攻分野との関連性 ・友人先輩等の情報 ・その他
Q 2	この授業を受講して、知識を広げ自己を高めることができましたか
Q 3	シラバスから具体的な学習目標のイメージを描くことができましたか
Q 4	学習目標を達成できましたか
Q 5	授業の難易度は適切でしたか
Q 6	授業中や授業時間外に発言や質問しやすいような配慮が感じられましたか
Q 7	授業の構成や進め方は適切だと思いましたか
Q 8	授業の内容は、学習意欲を起こさせるものでしたか
Q 9	集中して授業に取り組みましたか
Q10	授業に関連した内容について自主的に学習しましたか
Q11	教員のアドバイス・サポートは学習に効果的でしたか
Q12	授業の内容は全般的にみて満足するものでしたか
Q13	(教員自由設定欄)

表3-2-2 授業改善に資するアンケート(実験・実習)の設問項目

設問番号	設問項目(実験・実習用)
Q 1	この授業を選んだ動機は何ですか (この設問のみ複数回答可、次の選択肢から選ぶ) ・シラバスの内容 ・曜日や時間帯 ・必修科目だから ・専攻分野との関連性 ・友人先輩等の情報 ・その他
Q 2	この授業を受講して、知識を広げ自己を高めることができましたか
Q 3	シラバスから具体的な学習目標のイメージを描くことができましたか
Q 4	学習目標を達成できましたか
Q 5	授業中や授業時間外に発言や質問しやすいような配慮が感じられましたか
Q 6	授業の構成や進め方は適切だと思いましたか
Q 7	授業の内容は、学習意欲を起こさせるものでしたか
Q 8	集中して授業に取り組みましたか
Q 9	授業に関連した内容について自主的に学習しましたか
Q10	<u>この授業を受けたことにより、関連する講義で習ったことの理解が深まったと思いますか</u>
Q11	教員のアドバイス・サポートは学習に効果的でしたか
Q12	授業の内容は全般的にみて満足するものでしたか
Q13	(教員自由設定欄)

※設問番号にアンダーラインのある項目は、講義形式によって特有の設問項目である。調査は共通教育科目の受講生を対象としている。

表4 期末授業アンケート調査の回答数

		講義科目						講義 科目計	実験・実習科目			実験・ 実習 科目計	計
		教養	情報	外国語	体育・ 健康 (理論)	日本語 ・ 日本事情	基礎教育		教養 (実験)	体育・ 健康 (実習)	基礎教育 (実験)		
前期	回答 科目数	99	21	167	7	5	59	358	-	35	14	49	407
	延べ 回答者数	5,735	756	4,870	648	61	2,596	14,666	-	1,220	861	2,081	16,747
後期	回答 科目数	80	8	132	5	7	31	263	-	25	11	36	299
	延べ 回答者数	4,416	248	3,750	382	61	1,234	10,091	-	871	409	1,280	11,371

(2)アンケート結果の全体的な傾向

平成23年度に開講された共通教育科目のうち、表4に示すように前期407、後期299の授業で受講生の評価値が得られた。各授業の受講生の評価値を平均して、その授業の評価値とした。

前期で平均した結果を平成22年度の結果とともに示す。図1-1は、学期末授業評価アンケート（講義用）の設問項目の評価について、クラスの平均値を表している。図に示した数字は回答者の延べ人数を表す。

特に、講義形式の授業に対するアンケートでは、設問番号が200番代の授業評価に関する設問では、全ての平均評価値で前年度と比べ伸びがみられた。

Q208のアンケート内容の反映についても半数はどちらかといえばそう思うと評価していると思われるが、授業改善状況が受講生に認識できるよう、具体的な改善を行うか、または、現在の状況やその理由について学生に対して今以上に説明をしていく必要があると考える。受講生の自己評価に関しては、Q102シラバスを読んだかという設問に対して、平均評価値が約2.76で、大体または少し読んだという場合が多い傾向が見られた。Q104の1コマあたりの予習復習の時間については、平均評価値が約2.25で多くの学生は60分程度と考えられ、質の伴った学修を行うにはかなり少ないといえる。この問題の改善には受講生の学生生活のあり方や授業担当者の導き方、大学のカリキュラム構成等、様々な視点からのアプローチが必要であると考え。実験・実習科目については、図1-2に示す。特に、講義とは対照に、Q102を除くすべての項目で前年度と比べ平均評価値が減少しているので、今後の傾向に注意する必要がある。

Q104グループ実験・実習は自ら進んで行なったかという設問については、どちらかといえばそう思わないという評価がなされており、受講生に意欲を持たせる工夫をする必要性を感じる。この傾向は前後期ともに、また、昨年とも同様の傾向があり、改善活動の顕著な効果は認められなかった。評価値の低い項目については改善に向けて留意する必要があると思われる。

後期については、特に講義、実験・実習共に授業に関連した内容について自主的に勉強しますか(それぞれQ10およびQ9)で、その他の評価項目と比較して落ち込みが見られるので、自学自習の指導が必要と思われる。

図 1-1 前期末授業評価アンケートの設問項目別評価の平均値（講義）

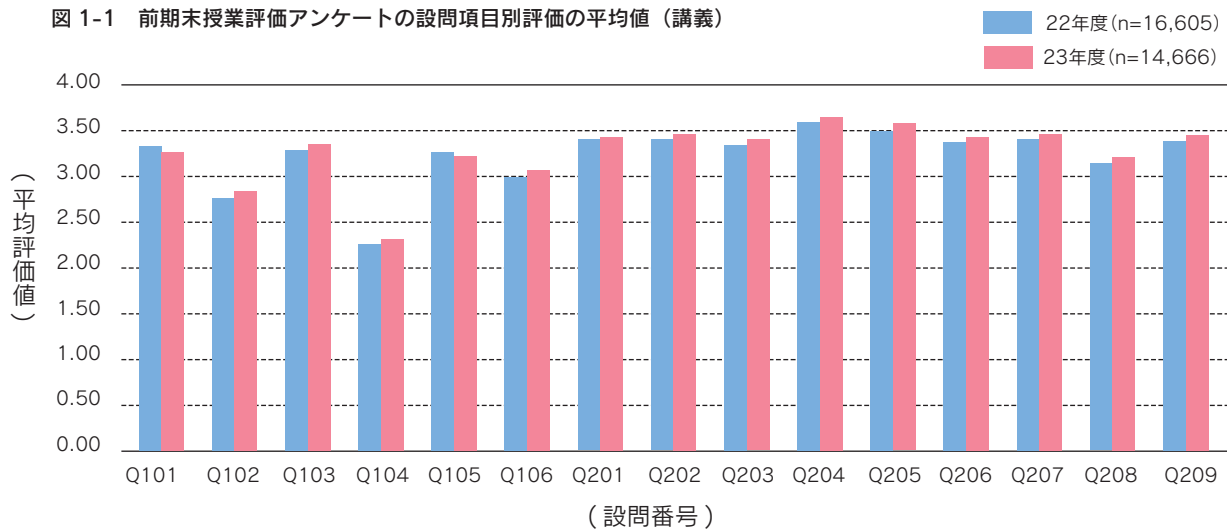


図 1-2 前期末授業評価アンケートの設問項目別評価の平均値（実験・実習）

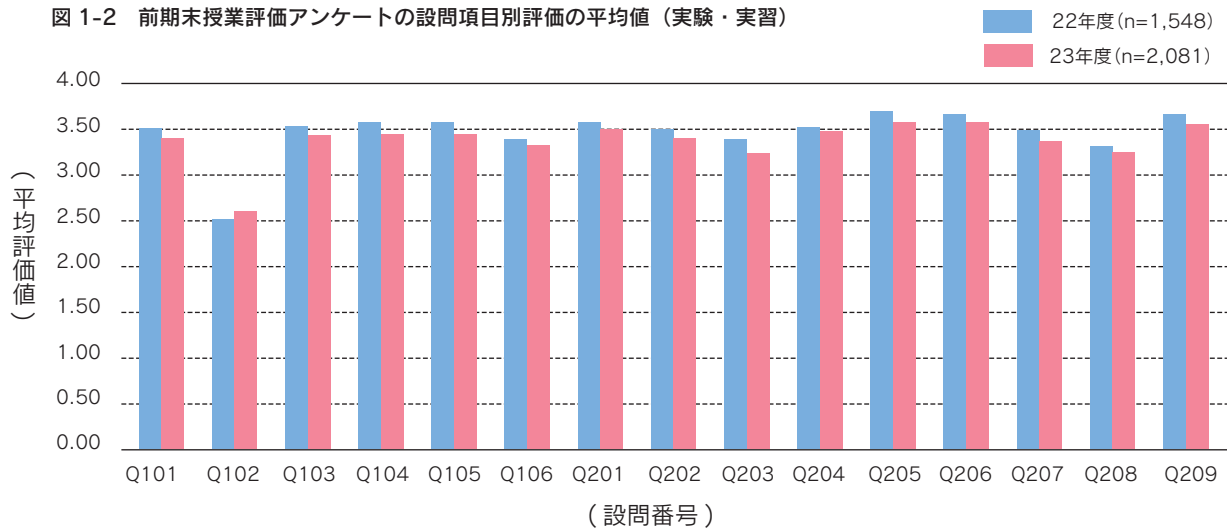


図 2-1 後期末授業改善に資するアンケートの設問項目別評価の平均値（講義）

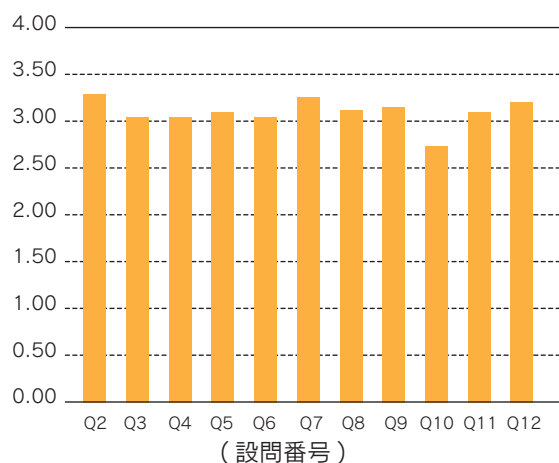
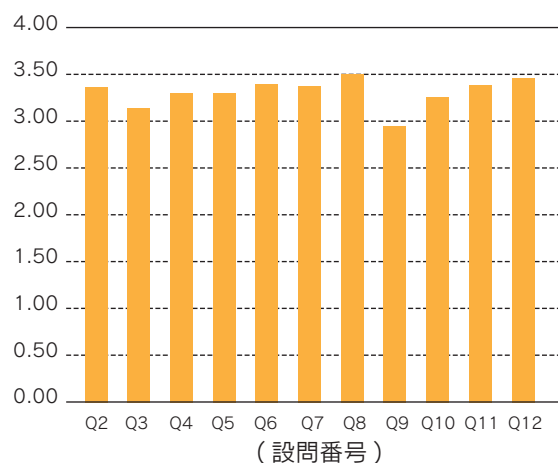


図 2-2 後期末授業改善に資するアンケートの設問項目別評価の平均値（実験・実習）



7. 授業改善メモ(報告書)

共通教育科目の授業担当者には、期末授業アンケートの結果を集計し、その結果を記入した結果シートを配付するとともに、集計結果を踏まえて、授業改善メモ(報告書)への記入を依頼している。前期はアンケート実施科目数407科目のうち授業改善報告書の提出数は223で提出率は54.8%であった。そして、後期はアンケート実施科目数299科目のうち授業改善メモの提出数は129で提出率は43.1%であった。

本年度から、授業改善メモ(報告書)は、「授業改善に資するアンケート」改定に伴い、前期と後期で設問項目を若干変更した。その変更内容は、以下のとおりである。

授業改善報告書(前期)設問項目

- Q106:この科目の学習目標(シラバスに記載)は、達成できたと思いますか。
- Q209:この授業は全体として満足できるものでしたか。
※アンケートに基づく感想と今後の改善点を記入
- 教育効果を上げるために現在実施している工夫や取り組みなど、本授業の特徴について記述してください。
- 自由記述欄

授業改善メモ(後期)設問項目

- Q4:学習目標を達成できましたか。
- Q12:授業の内容は全般的にみて満足するものでしたか
- その他、結果シートで特に気になった項目についてご記入ください
※アンケートの結果に基づく感想と今後の改善点を記入
- 教育効果を上げるために現在実施している工夫や取り組みなど、本授業の特徴について記述してください。
- その他授業改善についてのご意見、ご提案などがありましたら記入してください。

本部会では上記の改善に加えて、授業改善メモに記載された教育改善のための有益なコメントや要望等を他の教員と共有することを目的に、教育センターホームページに取りまとめた内容を平成23年度前期分から公開しているので、積極的に活用していただくように要望する次第である。なお、水産学部吉川委員による平成23年度前期開講科目を対象とした授業改善報告、および、工学部川畑委員による平成23年度後期「授業改善メモ」が、次のようにまとめられている。

平成23年度前期 授業改善に向けての提案(水産学部 吉川委員)

いずれの科目群でも、双方向型授業や参加型授業が積極的に取り入れられています。鹿大生の印象として、与えられた課題はしっかりとこなすものの、問題意識を持って積極的に取り組む姿勢が弱く、自ら「学ぶ」意識が低いように思われます。こういった受講生のモチベーションを高める一つの方法として、グループディスカッションやディベート、ピア・ラーニングの活用が試みられているようです。これに関連して、受講生の自主的な学習を促し、かつ受講生の理解度を確認する目的で、課題提案型あるいは課題解決型授業を試みたり、ミニツッパーパーや小テスト、小レポートなどを課している例が多く見られます。ここで大事なのが受講生へのフィードバックです。受講生のやる気を削ぐことがないよう、課題内容の解説、解答に対する添削、質問への回答など、フィードバックは迅速に行うのがよいと思われます。Moodleを活用することで、こういった取り組みが容易に実現できるとの声もありました。

また、基礎教育科目では、その授業内容が理論や概念の理解を中心としたものになりがちで、勢い受講生が理解しづらくなる傾向にあります。そこで、その理論や概念の応用面を身近な事例や地域の問題、最新のトピックと関連付けて具体的に示し、理解を深めさせるよう努めている様子が見て取れます。外国語科目では、視聴覚教材やパソコン教材を活用し、目や耳から入る情報も有効に活用するとともに、外国語教育番組や洋楽を紹介して授業外での学習を促す取り組みも紹介されていました。

- 双方向型授業、参加型授業の実践：グループディスカッション、ディベート、ピア・ラーニング
- 自主的学習の啓発：小テスト、小レポート、グループ学習、課題提案・解決型授業
- 受講生へのフィードバック：小テスト、小レポートの詳細な添削、受講生の理解度の把握とそれに応じた授業設計
- 具体的事例の活用：身近な事例、地域に密着した話題、最新のトピック、専門教育や就職先との関連性の明示
- Moodleの活用：活動記録の作成、質問箱の設置、受講生へのフィードバック、学習資料のアップロード

【授業改善に関連した要望】

授業アンケートについては、中間授業アンケートの充実や授業アンケートに関する事務作業（報告書の提出など）の軽減、授業アンケートの全学的な統一についてご要望をいただきました。授業改善を目的として、関連する授業の担当教員での勉強会の開催といったご提案もいただいています。

また、基礎教育科目や外国語科目では、受講生間で基礎学力の差が大きく、授業のレベル設定に苦勞されているようです。教育効果を上げるためにも、プレースメントテストの結果を踏まえて学力別クラス編成を行うのがよいとご提案がありました。また、演習問題を多く課す授業では、目が行き届くよう受講生数を制限してほしいとのご意見もいただきました。

いただいたご要望のなかには組織的に対応すべき内容も含まれています。今後、所掌の各委員会と連携しながら、皆様の授業改善にお役立ていただけるよう議論していきたいと考えています。

- 授業アンケートの改善：中間授業アンケートの充実、授業アンケートの全学的な統一化
- 授業改善：担当教員による勉強会の開催
- 基礎教育科目、外国語科目：学力別クラス編成の実施、受講生数の制限

平成23年度後期「授業改善メモ」のまとめ(工学部 川畑委員)

高等教育研究開発部会では、共通教育科目等で開講される授業で受講者による「授業アンケート」を実施し、その結果を各担当教員にフィードバックしています。そして、「授業アンケート」の結果等に基づいて、各担当教員から「授業改善メモ」が提出されていますが、この授業改善メモには教育改善のための有益なコメントや要望等が多数含まれていますので、ご提出いただいた「授業改善メモ」の内容を取りまとめて公開することにしました。

以下に、平成23年度後期に開講された授業の「授業改善メモ」のまとめを、ご紹介いたします。

【授業改善に向けての試みや工夫】

いずれの科目群においても、以下に示すように、受講生の自主的な学習を促すための工夫や受講生の関心を引き出させるような資料の工夫を施すなどの取り組みが数多くなされています。受講生の理解度の確認あるいは向上を目的として、ミニツツペーパーや小テスト、小レポートなどを課している例も多く見られます。また、Moodleを活用して、レポート課題等に対する受講生への迅速なフィードバックが行われている例もあります。学生に発言・発表

の機会を設けたり、グループワークやピア学習活動を行ったりするなどの学生参加型授業を志向することにより、一方的な講義調の授業にしないように工夫している例も多く見られました。

基礎教育科目の中には、高校での取得科目との関係などもあって、受講生間の基礎学力や理解力の差が大きく、授業のレベル設定に苦慮されているようです。授業レベルをどこに設定するかについては、授業担当者によって意見は分かれています。また、基礎教育科目は、学部の専門科目への橋渡しの役割があることを考えると、教育目標設定について学部関係者と授業担当者とのすり合わせも必要と思われる。

【授業改善に向けての試みや工夫の実施例】

【学生参加型授業】

グループワーク、ペアワーク、ピア学習活動、指名による発表、実践評価

【学生の関心を引き出すような資料の工夫】

学生の生活に即したトピックの活用、映像・画像資料(DVD、写真)・実験の実演など視覚教材の活用、新聞記事などの活用、講義内容と実社会の実情との関連性の明示、資格試験に基づいた資料の活用

【自主的学習の啓発】

ミニツツペーパー、小テスト、小レポート、Moodleやデジタルファイルなどを用いた自宅での学習の促進、グループ学習、課題提案・解決型授業

【受講生へのフィードバック】

小テスト、小レポートの返却、受講生の理解度あるいは習熟度の把握とそれに応じた授業設計

【Moodleの活用】

小テストの実施、受講生へのフィードバック、学習資料のアップロード

【授業(環境)改善に関連した意見等】

従来の「授業改善報告書」はフォーマットの簡素化を図り、平成23年度後期より「授業改善メモ」に名称変更しました。評点の高い授業については「授業改善メモ」の提出を免除してほしいというご要望もありましたが、「授業改善メモ」の作成を通して授業を振り返ることができ、非常に貴重な機会であるというご意見もいただいています。また、その中にはGPA制度の課題に対する問題提起もあり、授業および授業環境の改善に関連しましては、以下のようなご意見やご要望をいただきました。これら、既に教育センターで対応済みのものもありますが、共通教育科目の質的向上に活用できるように、所掌の各委員会と連携しながら議論していきたいと考えています。

- 大人数の授業では、グループ学習ができる教室設定を行ってほしい。
- 視聴覚資料の利用に関して、ブルーレイ・ディスクが使用できるようしてほしい。
- 授業改善方法についての事例提供や担当者同士の経験交流の場がほしい。
- 「板書を丁寧に」という要望が学生より出されるが、大学の講義における板書のあり方について議論をする場がほしい。
- 「授業改善に資するアンケート」結果以外にもFDに関する具体的な資料(世界や日本の高等教育の動向ならびにIT技術の発達を背景に進展してきたFDの成果など)を提供してほしい。
- 共通教育関係のFD関係企画があれば今後参加したいので教えてほしい。

8. あとがき

平成23年度は、前年度に高等教育研究開発部会で実施された企画を踏襲しながら、中間授業アンケート、期末授業改善に資するアンケートと授業改善メモ等の質問紙による調査を実施し、学内外に対する共通教育科目の授業公開・授業参観の機会を設けた。アンケートの回答並びに授業改善報告書の作成については、多くの皆様の協力をいただき実施している。そして、授業公開における参観者の意見や授業改善メモによる授業担当者からの授業改善に関わる方策や取り組みに対する批評等の意見を得ることで、授業改善が継続している。今後も授業改善のPDCAを円滑に進めるために、より多くの教員が授業公開・参観および授業改善メモに参加・協力していただくことが重要と考える。また、推奨できる授業改善方法もホームページで公開されているので、各教員のFD活動の一環として、参考にいただければと考えている。

現在、多くの授業担当者は個々に授業アンケートやミニッツペーパー、あるいは、受講生とのコミュニケーションを通して教育改善に役立つ情報を収集している。加えて、鹿児島大学でも組織的に学生の学習状況に関するアンケートを実施している。しかし、これらの各種データが有機的に結びついて教育改善を行える体系的なデータベースとして統合化されていないので、今後は、Institutional Research(IR)の観点に基づく検討が必要と思われる。

受講生を対象とした期末授業改善に資するアンケートでは、昨年度と同様に統計的に総体的な分析を行なうことによって科目の質や形態によって学生の求めるものや行動が異なることも見えてきた。今後は、社会的に求められている学習の質保障を達成するために、学生の自学自習能力を高めることに関してワーキンググループ、さらには高等教育研究開発部会が中心となって、各種アンケートデータの解析および提言等について取り組む必要があると考えている。

最後に、全ての企画を行うに当たり、各学部委員及び、教育センター教育推進係職員の多大なる支援があったことを記しておきたい。

(文責:西 隆一郎、加藤 晃子)

高等教育研究開発部会委員名簿

高等教育研究開発部長	西 隆一郎	教育センター	高等教育研究開発部	伊藤 奈賀子
法文学部	鳥飼 貴司	教育学部		小柳 正司
理学部	小山 佳一	医学部		内尾 康人
歯学部	植村 正憲	工学部		川畑 秋馬
農学部	白石 光也	水産学部		吉川 毅
事務局:学生部教務課教育推進係	係長 大園 豊美代	係員 加藤 晃子		

II

鹿児島大学
の
FD活動

第2部

各学部・研究科の
FD活動報告